６．第４面の調査

(1) 概　要（図版117　写真図版76）

調査区全域にわたって水田跡を検出した。

(2) 調査の結果

水田跡（図版117　写真図版77）

検出状況　第４面全域にわたって水田跡を検出した。Ⅰ区～Ⅲ区第４面で検出した水田跡に続くものである。検出面積は1532㎡に及ぶ。計208区画を検出した。

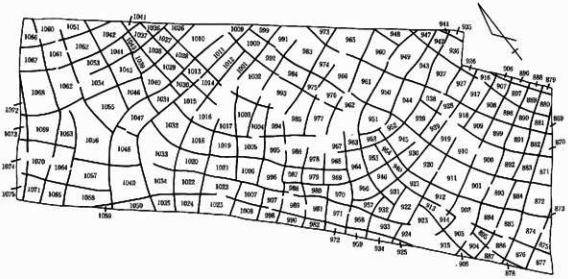
畦　畔　当地区においても、Ⅰ区～Ⅲ区同様、畦畔の規模に顕著な差は認められない。断面形は蒲鉾形をなし、基底部における幅20cm、水田面との比高５cmを測る。

平面形　Ⅰ区～Ⅲ区同様、いわゆる小区画水田に分類されるもので、基本的には方形ないし長方形を指向する。ただし、当地区中央北東部を中心に畦畔が舌状に平行し、これに対して畦畔が直交する。このため、平面形が台形あるいは不整形を呈するものも少なからず認められる。

面　積　各区画の面積は一定ではなく、狭い区画で1.2㎡、広い区画で20.4㎡と、かなりのバリエーションをもつ。平均して約5.59㎡である。

標　高　水田面の標高は一定しておらず、先述した当地区中央北東部が最も高く6.01ｍを測る。そして、ここを中心に南・西方向に低くなる傾向にあり、最も低い区画では5.83ｍを測る。最も標高の高い水田面と低い水田面との比高は18cmである。

なお、各区画の詳細については、第15・16表を参照されたい。



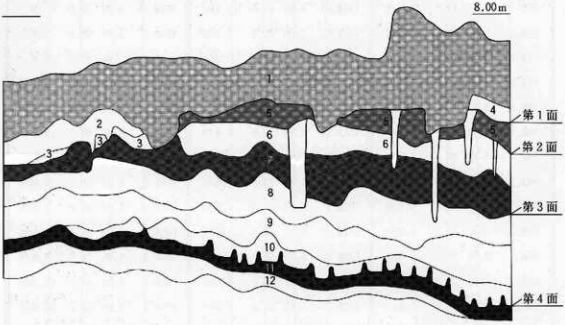
第126図　Ⅳ区第４面　水田跡

第15表　Ⅳ区第4面　水田跡一覧表 (1)　　( )内は検出面積

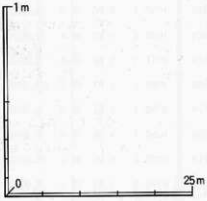
No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)	No.	標高 (m)	面積 (m²)
869	5.85	(0.6)	904	5.84	2.9	939	5.92	5.2
870	5.86	(2.3)	905	5.84	(0.7)	940	5.94	1.7
871	5.86	(4.9)	906	5.93	(0.4)	941	5.91	
872	5.85	(9.4)	907	5.93	2.3	942	5.92	2.2
873	5.84		908	5.91	4.1	943	5.90	5.7
874	5.85	7.4	909	5.91	4.5	944	5.93	8.5
875	5.83	(3.0)	910	5.90	8.2	945	5.92	5.3
876	5.89	5.0	911	5.98	10.7	946	5.95	4.3
877	5.85	(5.6)	912	5.87	5.0	947	5.92	(1.9)
878	5.88	(0.4)	913	5.87	2.5	948	5.93	(3.6)
879	5.91	(0.5)	914	5.87	1.2	949	5.91	10.8
880	5.88	2.8	915	5.88	(6.5)	950	5.94	9.2
881	5.87	2.4	916	5.96	(2.0)	951	5.94	6.8
882	5.85	3.4	917	5.94	5.3	952	5.93	2.7
883	5.83	4.6	918	5.92	3.2	953	5.95	2.3
884	5.85	4.8	919	5.92	5.9	954	5.90	2.2
885	5.83	6.1	920	5.92	7.7	955	5.96	4.1
886	5.87	3.9	921	5.92	3.7	956	5.95	4.7
887	5.86	(3.0)	922	5.92	7.3	957	5.94	2.2
888	5.91	(0.6)	923	5.91	(3.9)	958	5.95	4.3
889	5.90	2.9	924	5.94	(2.1)	959	5.93	(1.4)
890	5.86	2.6	925	5.93	(0.5)	960	5.93	8.6
891	5.88	5.0	926	5.92	(0.7)	961	5.94	8.9
892	5.86	5.1	927	5.91	5.0	962	5.94	4.3
893	5.86	6.7	928	5.93	2.8	963	5.92	5.4
894	5.87	5.3	929	5.93	3.6	964	5.95	5.0
895	5.84	1.7	930	5.93	4.3	965	6.00	(13.5)
896	5.93	(0.7)	931	5.93	2.6	966	5.93	8.4
897	5.90	3.4	932	5.94	2.4	967	5.94	7.3
898	5.91	3.6	933	5.93	4.1	968	5.92	4.0
899	5.89	4.9	934	5.94	(1.7)	969	5.94	3.1
900	5.87	7.3	935	5.91	(1.0)	970	5.93	4.2
901	5.88	8.6	936	5.90	(6.6)	971	5.95	4.7
902	5.88	6.0	937	5.91	8.5	972	5.93	(1.7)
903	5.86	5.6	938	5.92	2.9	973	5.94	(2.4)

第16表　Ⅳ区第４面　水田跡一覧表 (2)

No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)
974	5.93	4.7	1008	5.89	(4.0)	1042	5.95	6.5
975	5.95	2.5	1009	5.97	(2.1)	1043	5.94	1.2
976	5.93	4.3	1010	6.01	(10.1)	1044	5.95	2.9
977	5.95	7.9	1011	5.95	5.7	1045	5.93	5.9
978	5.95	5.9	1012	5.98	5.3	1046	5.96	5.3
979	5.94	2.8	1013	5.97	3.1	1047	5.94	8.4
980	5.92	2.0	1014	5.97	2.7	1048	5.90	11.1
981	5.93	4.9	1015	5.96	6.1	1049	5.86	13.8
982	5.89	2.0	1016	5.97	6.2	1050	5.85	(3.8)
983	5.95	11.2	1017	5.96	9.4	1051	5.93	(4.0)
984	5.97	5.9	1018	5.92	7.7	1052	5.92	7.1
985	5.97	8.5	1019	5.95	5.6	1053	5.95	4.9
986	5.94	6.9	1020	5.89	5.8	1054	5.95	8.0
987	5.93	2.4	1021	5.91	6.7	1055	5.96	12.3
988	5.91	2.1	1022	5.85	6.2	1056	5.92	20.4
989	5.92	4.5	1023	5.88	6.4	1057	5.89	11.4
990	5.91	(2.9)	1024	5.83	(4.5)	1058	5.82	(8.3)
991	5.96	(6.6)	1025	5.86	(6.7)	1059	5.86	(0.2)
992	5.96	3.8	1026	6.00	(3.1)	1060	5.92	(5.6)
993	5.96	10.7	1027	5.95	2.6	1061	5.92	6.2
994	5.97	4.4	1028	5.96	3.0	1062	5.91	10.4
995	5.94	5.4	1029	5.94	3.9	1063	5.87	5.3
996	5.93	7.1	1030	5.95	2.1	1064	5.88	7.2
997	5.90	3.4	1031	5.93	4.6	1065	5.80	(5.0)
998	5.91	(2.6)	1032	5.96	10.2	1066	5.93	(4.9)
999	5.96	(2.5)	1033	5.89	12.8	1067	5.90	(5.7)
1000	5.94	4.6	1034	5.86	8.9	1068	5.90	14.1
1001	5.95	5.3	1035	5.83	(3.5)	1069	5.89	9.2
1002	5.97	9.9	1036	5.95	(1.5)	1070	5.88	8.8
1003	5.97	5.5	1037	5.95	2.5	1071	5.84	(4.9)
1004	5.97	4.4	1038	5.95	3.1	1072	5.87	(0.6)
1005	5.94	5.7	1039	5.94	2.6	1073	5.86	(1.4)
1006	5.90	6.3	1040	5.95	5.5	1074	5.87	(3.0)
1007	5.87	4.7	1041	5.98	(0.7)	1075	5.84	(2.4)



1．耕作土・盛土
2．極細砂　5Y 7/1　灰白
3．シルト質極細砂　10YR 7/1　灰白
4．極細砂混じりシルト質極細砂　5YR 3/2　暗赤褐
5．極細砂質シルト（土壌層Ⅰ）　N 4/0　灰
6．極細砂　5Y 7/1　灰白
7．シルト質極細砂（土壌層Ⅱ）　10YR 6/1　褐灰
8．極細砂（洪水層）　5Y 7/1　灰白
9．シルト質極細砂（土壌層）　10YR 7/1　灰白
10．極細砂質シルト（土壌層）　N 6/0　灰
11．シルト（土壌層Ⅲ）　7.5YR 1.7/1　黒
12．粘土（土壌層）　N 3/0　暗灰



耕土　土壌層Ⅰ　土壌層Ⅱ　土壌層Ⅲ（水田土壌）

第127図　V区基本層序

第６節　Ⅴ区の調査

１．基本層序

はじめに　Ⅰ区からⅣ区を通じて認められた基本層序が、基本的には当地区においても認められる（第127図）。全体的に土壌層Ⅰ・土壌層Ⅱ・土壌層Ⅲともに北西側へいくほどそのレベルが高くなる傾向にあるが、調査区北隅において、水平もしくは低くなる傾向がわずかに認められる。ただし、土壌層Ⅰと土壌層Ⅱの間層がなくなる形で、土壌層Ⅰが土壌層Ⅱと一体となり、同一の土壌層となっている。

現耕作土　当遺跡の現地表面をなす水田土壌層である。土壌層Ⅰ・土壌層Ⅱ・土壌層Ⅲについては西側へいくほど高くなる傾向が認められるのに対して、当水田土壌層は、Ⅳ区付近の水路を境として水平もしくは西側へいくほど低くなる傾向が認められる。

現耕作土と土壌層Ⅰとの間層は、当調査区ではほとんど認められない。Ⅳ区に近い東隅においてわずかに赤褐色極細砂混じりシルト質極細砂（第４層）が認められる程度である。また、土壌層Ⅰが土壌層Ⅱと一帯となったあたりから西側については、土壌層Ⅱとの間に、灰白色極細砂（第２層）と灰白色シルト質極細砂（第３層）の堆積が認められる。

土壌層Ⅰ　灰色極細砂質シルト１層からなる。先述したように、調査区中央部付近で土壌層Ⅱに吸収される形で消滅する。この位置は、第19図で復原した微高地の尾根とほぼ一致する。

土壌層Ⅰの下層は、灰色極細砂１層からなり、土壌層Ⅰが土壌層Ⅱに吸収される地点でなくなる。全体的に、北西側へいくほど高くなる傾向にある。

土壌層Ⅱ　褐灰色シルト質極細砂１層からなる。北西側へいくほど高くなる傾向にあるが、土壌層Ⅰを吸収したあたりから水平な堆積に変化する。上記の変化と対応するように、Ⅳ区側から土壌層Ⅰとの吸収地点に向かって層厚が薄くなり、水平部分においてはほぼ一定になる傾向が認められる。

完新世段丘　なお、当地区の西隅においては、当地区の西側に埋没する完新世段丘崖（第23図）の影響が認められ、崖が崩れ西側への落ち込みとなっている。このため、当土壌層は完新世段丘の影響が認められる西隅においては認められない。

当土壌層の下層は、上から灰白色極細砂、灰白色シルト質極細砂、灰色極細砂質シルトの順に堆積している。灰白色極細砂は基本的には土壌層Ⅱと同一堆積によるもので、洪水に起因する堆積層と考えられる。下層の灰白色シルト質極細砂と灰色極細砂質シルトはともに土壌層であるが、土壌化は顕著とはいえず、両土壌層中には土器が含まれていなかった。また、両土壌層の下面においても遺構は認められなかった。

土壌層Ⅲ　黒色シルト１層からなる。Ⅳ区側から北西側にかけて高くなる傾向にあり、この傾斜は現耕作土を含めた各土壌層のなかで最も顕著である。ただし、当土壌層のレベルは、土壌層Ⅰと土壌層Ⅱが一帯となったあたりより北西側においてピークとなり、それより北西側はわずかに低くなる傾向にある。

下層には暗灰色粘土１層が認められる。土壌層Ⅲと同一堆積によるものと考えられる。また、当層自体も土壌化が著しく、その状況からヨシ類に起因するものと考えられる。

第1面

第2面

第3面

第4面

第128図　V区の遺構

２．土壌層と遺構の検出

当地区においても、Ⅰ区～Ⅳ区同様、第１面から第４面の４面にわたって遺構を検出した。

第１面　土壌層Ⅰの上面で検出した遺構である。当地区においても、堆土の違いから２回（第１面(1)・第１面(2)）に分けて調査を行った。

第１面(1)　鋤溝・土坑と溝（SD17）を検出した。SD17は、調査直前まで用水路として機能していたもので、出土遺物から平安時代まで遡ることが明らかとなった。

第１面(2)　溝と水田跡を検出した。水田跡については、当地区西隅の完新世段丘Ⅱ面の崖面の上層部にあたる西側へ落ち込んだ所で検出したものである。時期的には近世以降と考えられる。

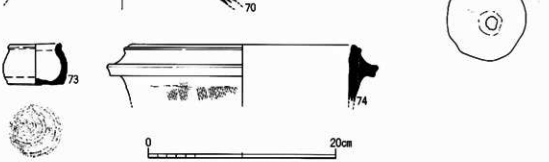
第１面を検出するにあたり、遺物の出土はごくわずかで、Ｍ４（第129図）のＵ字形鋤先の一部が出土したにすぎない。

第129図
Ⅴ区第１面出土鉄製品

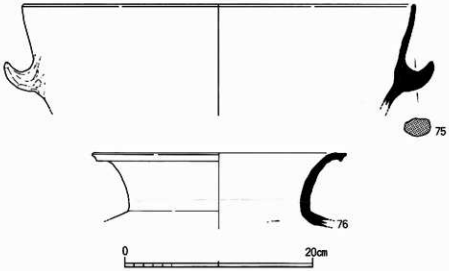
第２面　土壌層Ⅰを掘削した、土壌化のおよんでいない灰白色極細砂上面で検出したものである。ただし、先述したように、土壌層Ⅰは途中で土壌層Ⅱと一帯となる。したがって、一帯となった箇所より西側については、土壌層Ⅱの上面で検出したことになる。

検出した遺構としては、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・木棺墓など多岐にわたる。時期についても、弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期・奈良時代・平安時代～鎌倉時代と多岐にわたる。

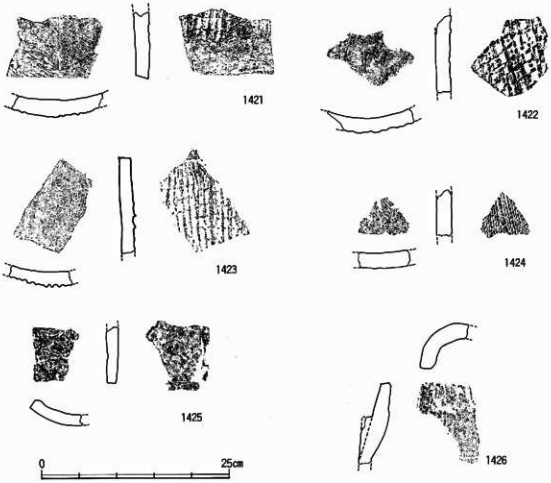
当遺構面を検出する際に出土した土器（第130図・第131図）についても、弥生時代前期から平安時代にかけての時期を示すものである。また、出土瓦（第132図）についても、同様の時期を示すものである。さらに石器（第133図・第134図）についても、弥生時代前期から中期にかけてのものである。このように、出土遺物からみても、上記の年代とほぼ一致するものである。



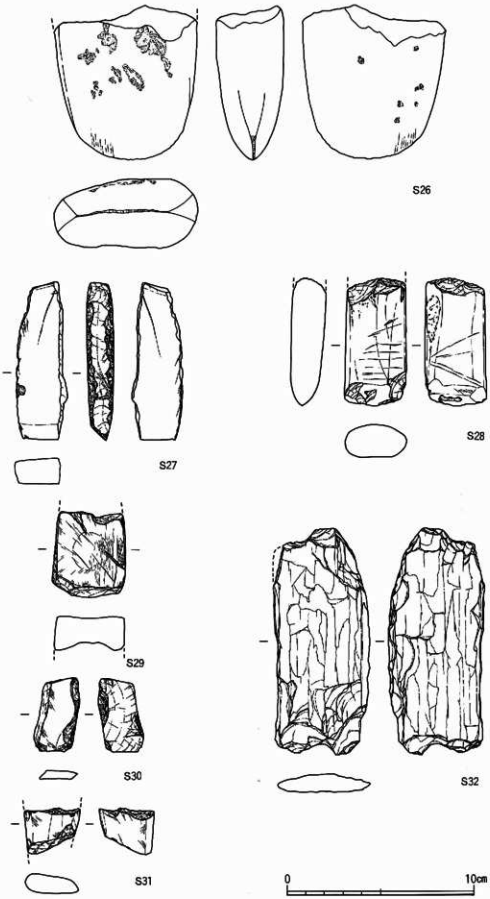
第130図　Ⅴ区第２面出土土器（1）



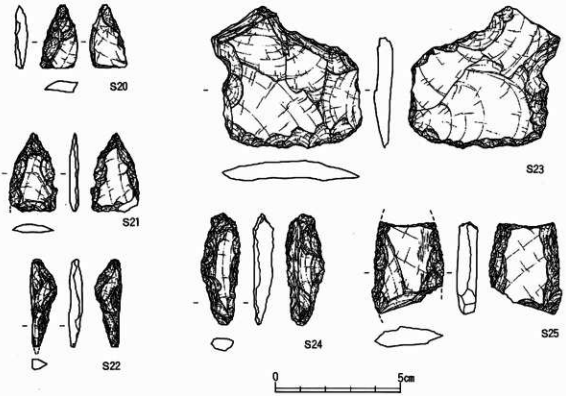
第131図　V区第2面出土土器 (2)



第132図　V区第2面出土瓦



第133図　Ⅴ区第２面出土石器（1）



第134図　Ⅴ区第２面出土石器 (2)

第３面　土壌層Ⅱを掘削した、土壌化の及んでいない灰白色極細砂上面で検出したものである。第２面と比べて遺構の密度・内容はかなり乏しく、土坑と溝をわずかに検出したにすぎない。時期は、土器の出土量がわずかであるため明確にできないが、弥生時代前期であることは間違いない。

第４面　土壌層Ⅲの上面で検出している。調査区全域にわたって水田跡を検出した。Ⅰ区～Ⅳ区第４面で検出した水田跡に続くものである。検出した水田跡は、いわゆる小区画水田に分類されるもので、一区画の面積は1.7～10.3㎡である。

第135図　第４面出土石器

時期については、当水田面上から土器が出土していないため、限定することは困難である。Ⅰ区～Ⅳ区第４面から続く水田跡であることから、弥生時代前期に位置付けられる。また、当遺構面を検出する際に出土した石鏃（第135図）も、上記の年代観を支持するものである。

２．第１面(1)の調査

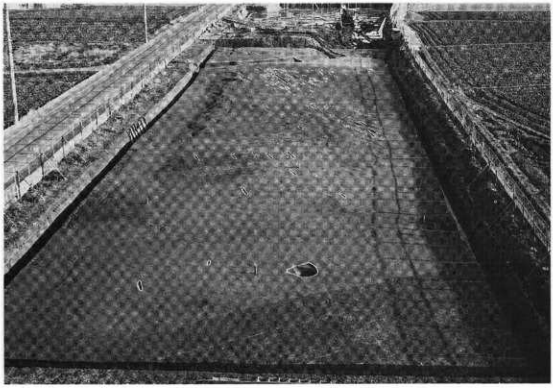
(1) 概　要（図版118　写真図版78・79）

概　要　本調査区で検出した最も上層の遺構検出面で、埋上の違いにより２つに分けたうちの、新しく位置付けられる遺構群である。

検出された遺構は土坑１基、溝１条、鋤溝多数がある。

溝は調査区の北東隅において検出された。Ⅳ区第１面から続く溝である。直角に屈曲しており、北から東へ向かっている。

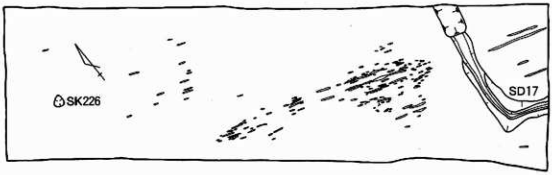
鋤溝は調査区西隅以外で、調査区の中央からやや東側を中心に検出された。方向はすべて同じで、東西方向に近い。



第136図　Ⅴ区第１面 (1)

(2) 調査の結果

Ⅰ. 土　坑



第137図　Ⅴ区第1面(1)　土坑・溝

ＳＫ２２６（図版119　写真図版79）

検出状況　調査区西側で検出された。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　２段に掘り込まれており、上段は平面形が１辺約1.2mの隅丸三角形である。横断面は西側が直線的に立ち上がり、東側は緩い傾斜である。下段は平面形が直径70cmの円形で、横断面は長方形を呈し、深さは12cmである。下段からは木質が出土しており、その残存状況から本来は桶が置かれていたものと思われる。

埋没状況　人為的に埋められた層は桶の裏込めと考えられることから、土坑は桶が埋没した後、崩壊し、埋没したと思われる。

出土遺物　特に遺物は出土していない。

時　期　埋土の特徴から判断して、近世以降と考えられる。

Ⅱ. 溝

ＳＤ１７（図版119　写真図版79）

検出状況　当調査区東隅で検出した溝で（第137図）、Ⅳ区から続くものである。SD18と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　東南東－西北西方向から北北東－南南西方向にほぼ鍵形に屈曲する溝で、東南東側はⅣ区へ、北北東側は調査区外までのびている。

溝の規模については、Ⅳ区で報告した（130ページ）通りであるので、本項においては省略する。

埋没状況　Ⅳ区と同様である。

出土遺物　須恵器・緑釉陶器・備前焼・近世陶器が出土している。

須恵器　図化できたのは735の椀のみである。底部は回転糸切りにより切り離され、ハケ状のものにより仕上げられている。外面には火襷痕が認められる。

緑　釉　734の１個体である。須恵質の胎土で、

第138図　SD17出土土器

高台内側以外全面に施釉されている。

備前焼　738のすり鉢（第138図）のみである。

近世陶器　量的には比較的多く出土しているが、図化できたのは736と737の２個体である。736は、高い削り出し高台からなる碗である。高台を除く内外面は施釉されている。ただし部分的である。737は削り出し高台を有する皿と考えられる。高台およびその内側を除く内外面に施釉されているが、見込み部は蛇の目状に釉が掻き取られている。

時　期　出土土器をみると、平安時代の須恵器・緑釉から近世陶器までとかなりの時期幅をもつ。したがって、平安時代以降、徐々に埋没していったものと考えたい。特に、平安時代を中心とした時期と近世とに大きく大別できることから、土層観察で２層に分層した結果に対応するものと考えられる。

鋤　溝

検出状況　調査区の中央から東側において鋤溝が検出された。西隅の水田面とは約20cmのレベル差がある。いずれの鋤溝も同じ方向を向いており、N68～70°Wである。この方向はSD17で区画された内側の鋤溝とも対応する。

鋤溝が検出できた部分の標高は約6.84～6.94ｍで、中央付近の鋤溝が集中している部分からSD17に区画されている部分が高く、西側ほど低くなっている。

出土遺物　特に出土していない。

時　期　他の地区で検出した鋤溝とほぼ同時期の中世後半以降と考えられる。

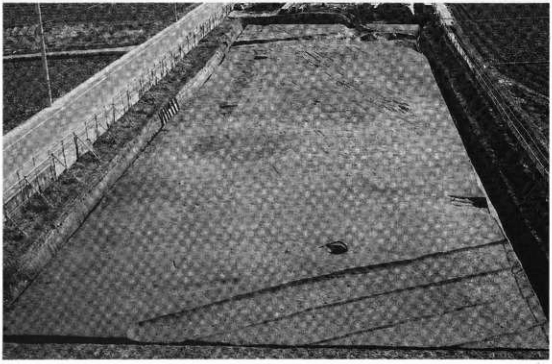
3．第1面(2)の調査

(1) 概　要（図版120　写真図版80・81）

概　要　本調査区で検出した最も上層の遺構検出面で、埋土の違いにより2つに分けたうちの、古く位置付けられる遺構群である。

検出された遺構は溝3条と、水田跡である。

溝は3条とも調査区の東隅において検出された。水田跡は、調査区西隅において検出されている。



第139図　V区第1面(2)

(2) 調査の結果

水　田（図版121・122　写真図版82）

検出状況　調査区の西隅で検出されたため、全体の状況は不明である。検出面から約50cmほど下がっており、水田の1区画を示していると考えられる。東側は直線的であり、北側で若干西側に屈曲している。おそらくこの屈曲点がこの1区画の北限であると思われる。

水田は、この区画の中で上下2層に分けることができた。

上　層　上層は検出面から約20cmほど下がっており、畦畔を良好に検出できたが鋤溝は検出されていない。畦畔の方向はN13°E、各畦畔の下場の間隔は2m、畦畔の幅は下場で約30cm、高さ5～10cmである。畦畔で仕切られた各面の標高は、東から順に6.59m、6.57m、6.56m、6.58mであり、若干西側に向かって低くなっているものの、ほとんどレベル差はない。埋土は灰色極細砂混じり黒褐色シルトであった。

下　層　下層も上層と同じ検出面であるが、上層と異なる点は鋤溝と畦畔の方向が異なっていることで、なおかつその鋤溝は畦畔の下を通っていることである。このため、水田を上下の2層に分けて解釈することとした。鋤溝の方向はN0°～5°Eであるが、東側は同一水田

面の端にあたるため、水田の東辺の方向と合っている。

下層の水田面からさらに下方には極細砂～シルトの層が認められるが、ほとんどがブロック状であり、埋められた土であることがわかる。

出土遺物　特に出土していない。

時　期　埋土から近世以降と考えられる。

ＳＤ１８（図版119　写真図版82）

検出状況　Ｖ区の南隅付近に位置する（第140図）。SD17に切られている。

形状・規模　溝は途中で屈曲しており、北東から西方向に流れている。長さは14.6ｍが検出された。幅は検出面で6.9～7.6ｍ、溝底で5.7～6.8ｍを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは1.15ｍである。溝底の標高は北東端で5.94ｍ、西端で5.74ｍであり、北東方向から西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況　埋土は大きく２層に分けられ、上層は灰色極細砂、下層はラミナからなる。１層は灰色シルト、４～６層は灰～黄灰色シルトと細砂のラミナ、２・３及び７～９層はオリーブ灰～灰色シルトである。

出土遺物　740・741は平瓦である。740はほとんど平らで、タタキは残っておらず、拓本をとった面には板ナデまたはへらケズリらしい痕跡が残っている。瓦質に近い焼成である。741の凸面は雑な長方形格子タタキで仕上げており、凹面は縦方向の板ナデの下に薄く布目が残っている。焼成はやや不良である。

時　期　出土遺物から、平安時代と考えられる。

ＳＤ１９

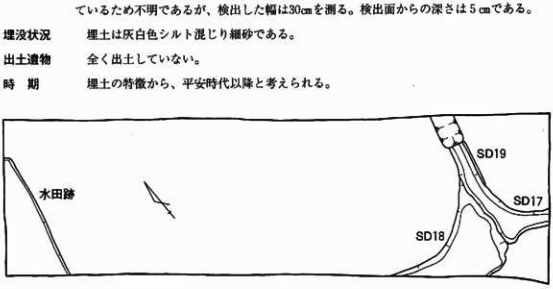
検出状況　Ｖ区の東隅付近に位置する（第140図）。SD17とほとんど重なっており、東肩に切られる形で極くわずかの部分が検出されただけである。

形状・規模　溝の方向は北東から南西であり、長さは6.40ｍが検出された。溝の幅はSD17に切られているため不明であるが、検出した幅は30㎝を測る。検出面からの深さは５㎝である。

埋没状況　埋土は灰白色シルト混じり細砂である。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　埋土の特徴から、平安時代以降と考えられる。



第140図　Ｖ区第１面(2)　水田・鋤溝

4．第2面の調査

(1) 概　要（図版123　写真図版83・84）

検出状況　第1面から約10cm下がった面を検出面としている。最終的な検出面の標高は、西側がやや高く東側が低めである。

遺構は中央から東側に向かって多く検出された。また、西側については上層の水田がこの遺構面まで及んでいるため、遺構は認められない。

遺　構　検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝、奈良－鎌倉時代の土坑・溝・木棺墓・掘立柱建物跡がある。

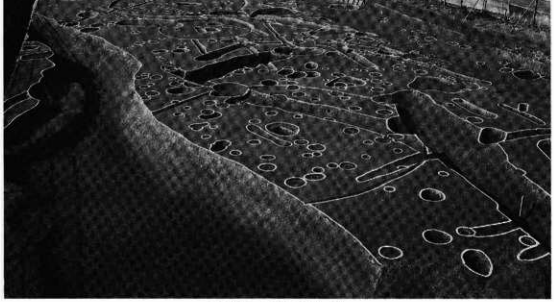
竪穴住居跡　竪穴住居跡は合計7基検出された。平面形は円形・隅丸方形があり、隅丸方形の住居跡の中には、ベッド状遺構を有するものもある。

掘立柱建物　12棟が検出された。調査区の中央部からやや東側にかけて検出されている。完全に検出できたものは少なく、半分は後世の攪乱、あるいは調査区の制限により不明である。

土　坑　遺構の集中する中央から東側に多く検出された。特に規則性は認められないが、東側の方が比較的規模が大きいものが密集する傾向がある。

溝　調査区の中央から東側にかけてほぼ東西方向に蛇行する溝が検出され、この溝により調査区が大きく2分されている。また、調査区中央部で東西方向の溝が3条、調査区東部で南北方向の溝が4条検出されており、複雑に交差する溝の中では比較的まとまっている。

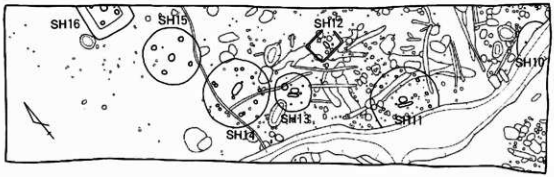
木棺墓　調査区の東側で、比較的大きい溝SD98の北肩で2基検出された。同じ方向を向いて近接して並んでいる。



第141図　V区第2面

(2) 調査の結果

Ⅰ．住居跡



第142図　Ⅴ区第２面　住居跡

ＳＨ１０（図版125　写真図版85）

検出状況　調査区東隅に位置する（第142図）。SK94の南東側、SK96の東側にあたる。SD98に切られている。

形状・規模　平面形は円形を指向するものと考えられるが、SD98により全体の２/３を切られているため、明確にできない。このため、当住居跡の主軸方向についても明確にできない。

径約4.50ｍと復元される。床面の深さは検出面から３㎝を測り、その標高は6.75ｍである。復元される床面積は8.63㎡である。

埋　土　黒褐色シルト質極細砂１層が堆積していた。

屋内施設　柱穴と周壁溝を検出した。

柱　穴　主柱穴と考えられる２穴を検出した。Ｐ１は、掘り方径24㎝、床面からの深さ37㎝を測る。Ｐ２は、掘り方径27㎝、床面からの深さ15㎝を測る。ともに柱痕は確認できなかった。Ｐ１とＰ２との距離は2.20ｍである。

周壁溝　住居跡を検出した範囲では全周する。床面における幅は15㎝を測り、床面からの深さは３㎝、住居跡検出面からの深さは６㎝である。

出土遺物　サヌカイトの剥片0.7ｇが出土している。

時　期　出土土器から判断することは困難であるが、住居跡そのものの復元される平面形・規模から判断して、弥生時代中期と考えられる。

ＳＨ１１（図版126　写真図版86・187）

検出状況　当地区南東部で検出している（第142図）。SD98に切られ、全体の約１/３を欠く。また、SD112・SD113・SK136・SK143等の遺構にも切られている。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。中央土坑の西側と東側の柱穴を基準とした方位は、N70°Wである。

規模は径8.40ｍを測る。検出面から床面までの深さは５㎝で、床面における標高は6.70ｍである。復元される床面積は44.8㎡である。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑を検出した。

柱　穴　主柱穴６穴（Ｐ１～Ｐ６）と中央土坑の西側（Ｐ７）と東側（Ｐ８）に各１穴の計８穴

を検出した。

主柱穴　Ｐ１は掘り方径45cm、柱痕径16cm、床面からの深さ32cmを測る。Ｐ２は掘り方径40cm、柱痕径16cm、床面からの深さ47cmを測る。Ｐ３は掘り方径39cm、柱痕径17cm、床面からの深さ28cmを測る。Ｐ４は掘り方径35cm、柱痕径15cm、床面からの深さ23cmを測る。Ｐ５は掘り方径40cm、柱痕径17cm、床面からの深さ60cmを測る。Ｐ６は掘り方径43cm、柱痕径18cm、床面からの深さ47cmを測る。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で1.64m、Ｐ２－Ｐ３間で1.93m、Ｐ３－Ｐ４間で2.80m、Ｐ４－Ｐ５間で2.24m、Ｐ５－Ｐ６間で3.44mを測る。

他　Ｐ７は掘り方径29cm、床面からの深さ10cmを測る。Ｐ８は掘り方径33cm、床面からの深さ11cmを測る。両柱穴とも柱痕は確認できなかった。両柱穴間の距離は2.12mである。

周壁溝　住居跡を検出した範囲では全周する。床面における幅15cm、底部の幅５cm、床面からの深さ２cm、住居跡検出面からの深さ６cmを測る。

中央土坑　土坑Ａと土坑Ｂを検出した。

土坑Ａ　平面形は溝状を呈する。主軸方向はＰ７とＰ８を結ぶラインとほぼ一致する。長軸方向で２m、その直交方向で23cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における床面からの深さは６cmである。埋土は褐灰色極細砂１層で、わずかに炭片の混入が認められた。

埋土内から甕の体部片が出土している。

土坑Ｂ　土坑Ａの北東側に位置し、平面形は楕円形を呈する。主軸方向は土坑Ａとほぼ一致する。長軸方向で1.08m、その直交方向で92cmを測る。当土坑は２段にわたって掘り込まれており、上段が逆台形、下段が深いＵ字形をなす。最深部における床面からの深さは59cmと、土坑Ａと比べて大変深い土坑である。

埋土は４層からなる。下から、黒色シルト、黒褐色シルト混じり極細砂～細砂、黒褐色シルト、黒褐色シルト混じり極細砂の順に堆積していた。この内、最下層は炭片からなる炭層である。また、上から２層目にも最下層ほどではないが炭片の混入が認められた。

埋土内から甕の口縁部片・体部片・底部片が出土している。

なお、土坑Ａと土坑Ｂを合わせた面積は1.23㎡で、復元される床面積に占める割合は2.7%である。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　壺・甕・鉢および粘土塊が出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。

壺　口縁部片と底部片が出土している。詳しい型式の特定は困難である。

甕　弥生時代中期の特徴を示す口縁部片・体部片・底部片が出土している。

鉢　台付鉢の台部片が出土している。

石　器　石鏃とサヌカイトの剥片が出土している。

石　鏃　Ｓ72はサヌカイト製の石鏃である。基部欠損のため元の形は不明であるが、比較的三角形に近い形状をしており、平基式または凹基式の可能性が高い。現存の長さ1.95cm、幅1.45cm、厚さ0.25cm、重さ0.6ｇである。

剥　片　2.8ｇが出土している。

時　期　出土土器および中央土坑の形態的特徴から、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ１２（図版125　写真図版85）

検出状況　Ｖ区中央部東側に位置する（第142図）。SH13・SH14の東側にあたる。SK153～SK156・SD119を切っている。

形状・規模　平面形は長方形を呈するが、北東隅の一部を欠く。周壁溝を基準とした方位はＮ２°Ｗである。規模は、南辺で3.50ｍ、西辺で2.70ｍを測り、北辺で3.70ｍ、東辺で2.70ｍと復元される。検出面からの床面までの深さは７㎝で、床面の標高は6.72ｍである。復元される床面積は15.4㎡である。

埋　土　灰褐色シルト質極細砂１層が堆積していた。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑・土坑を検出した。

柱　穴　主柱穴は本来４穴と考えられるが、検出できたのは２穴に限られる。

Ｐ１は掘り方径20㎝、床面からの深さ19㎝を測る。Ｐ２は、掘り方径23㎝、床面からの深さ10㎝を測る。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で１ｍを測る。

柱穴内からは時期・器種を特定できるような遺物は全く出土していない。

周壁溝　北東隅が一部途切れる。床面における幅10㎝、床面からの深さ５㎝、検出面からの深さ15㎝を測る。なお、周壁溝内からは、遺物は全く出土していない。

中央土坑　当住居跡のほぼ中央部で検出した土坑である。平面形は長楕円形で、その規模は主軸方向で98㎝、その直交方向で33㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における床面からの深さは８㎝である。当土坑の面積は0.41㎡で、床面積における比率は2.7％である。

埋土は、暗褐灰色砂混じりシルト１層である。

埋土内から、甕の底部片と蛸壺が出土している。

土　坑　２基（土坑１・土坑２）検出している。

土坑１　中央土坑の南側、当住居跡南壁に接する位置で検出している。平面長方形を呈し、その主軸方向は当住居跡の主軸方向とほぼ一致するもので、東西方向に主軸方向をとる。床面におけるその規模は、主軸方向で50㎝、その直交方向で34㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは20㎝である。埋土は褐灰色シルト質極細砂１層からなる。

土坑２　中央土坑の東側、Ｐ１とＰ２を結ぶラインのやや東側に位置する。平面形はやや不整形気味の方形をなし、その規模は38㎝×37㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における床面からの深さは４㎝を測る。埋土は灰色シルト質極細砂と黄灰色シルト質極細砂の２層からなる。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　甕の底部片と蛸壺が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。両個体とも、胎土中に含まれる砂粒はわずかである。

石　器　埋土中より、サヌカイトの剥片0.9ｇが出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

ＳＨ１３（図版127　写真図版87）

検出状況　調査区のほぼ中央部、SH14の南東に位置する（第142図）。SK172・SD120に切られている。上記の遺構に切られている以外は、ほぼ完存する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、主柱穴を基準とした方位はN45°Eを指向する。

規模は、径4.8mを測る。検出面から床面までの深さは10cmを測り、床面の標高は6.74mである。床面積は16.3㎡である。

埋　土　褐灰色砂混じりシルト１層からなる。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑・土坑を検出した。

柱　穴　主柱穴４穴（Ｐ１～Ｐ４）と、中央土坑の主軸ライン上で２穴（Ｐ５・Ｐ６）の計６穴を検出している。

主柱穴　Ｐ１は、掘り方径22cm、床面からの深さ22cmを測る。Ｐ２は、掘り方径21cm、床面からの深さ35cmを測る。Ｐ３は、掘り方径22cm、床面からの深さ57cmを測る。Ｐ４は、掘り方径21cm、床面からの深さ17cmを測る。いずれも柱痕は確認できなかった。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で1.52m、Ｐ２－Ｐ３間で2.12m、Ｐ３－Ｐ４間で1.48m、Ｐ４－Ｐ１間で2.45mを測る。

柱　穴　Ｐ５は、掘り方径16cm、床面からの深さ15cmを測る。Ｐ６は、掘り方径25cm、床面からの深さ17cmを測る。いずれも柱痕は検出できなかった。Ｐ５－Ｐ６間の距離は1.45mを測る。

周壁溝　SK172に切られている箇所以外は全周する。床面における幅12～20cm、底部幅５cm、床面からの深さ３cm、住居跡検出面からの深さ７～10cmを測る。

中央土坑　土坑Ａと土坑Ｂの２基を検出した。

土坑Ａ　溝状を呈し、その主軸方向は主柱穴の示す方位とほぼ一致する。主軸方向で1.5m、その直交方向で35cmを測る。横断面は深い皿形を呈し、最深部における床面からの深さは12cmである。埋土は２層からなり、下から灰色極細砂質シルト、灰色シルト質極細砂の順に堆積していた。両層の間には薄い炭層が認められた。また、上層からは比較的多くの土器が出土している。

土坑Ｂ　土坑Ａの北東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、主軸方向は土坑Ａとほぼ一致する。主軸方向で1.08m、その直交方向で60cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは16cmを測る。

埋土は、灰色極細砂混じりシルト質極細砂１層からなる。埋土内からは土器（743）・炭の細片およびサヌカイトの剥片が出土している。

土坑Ａと土坑Ｂを合わせた面積は11.1㎡で、床面全体に占める比率は6.8％である。

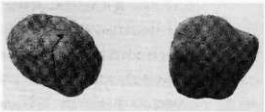
土　坑　土坑Ｂの北側、Ｐ５の西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、その主軸方向は中央土坑とほぼ一致する。主軸方向で97cm、その直交方向で78cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における床面からの深さは12cmである。埋土は、黒褐色シルト質極細砂１層からなり、土器と炭の小片が含まれていた。

出土遺物　土器および石器他が出土している。

土　器　甕（742）と底部（743）・脚部（744）が出土している。

甕　口縁部片１点（742）が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

底部　壺の底部と考えられる。内面は指オサエにより仕上げられているが、外面については磨滅のため観察できない。



第143図　SH13出土粘土塊

脚部　高坏もくしは台付鉢・台付壺等の脚部と考えられるが、器種の特定は困難である。内面はハケ調整の後ナデ調整、外面はナデ調整により仕上げられている。

石器　埋土内と土坑Ｂからサヌカイトの剥片が出土している。出土量は、埋土内から69.3ｇ、土坑Ｂから0.3ｇ出土している。

他　２㎝大の粘土塊（第143図）が数点出土している。

時期　出土土器および中央土坑の特徴から、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ１４（図版128・129　写真図版88・187・188）

検出状況　調査区中央やや北西側、SH13の北西側、SH15の南側に位置する（第142図）。SK171・SK167を切り、SD120・SD121に切られている。

主柱穴に切り合い関係が認められることから、１回は建て替えが行われたものと考えられる。ただし、中央土坑に変化は認められない。

形状・規模　平面形は円形を呈するが、部分的に直線的な箇所も認められる。このため、径は8.30ｍ－8.70ｍと一定しない。中央土坑を基準とした主軸方向はＮ75°Ｅを指向する。

検出面から床面までの深さは３～８㎝を測り、床面における標高は6.77ｍである。床面積は52.4㎡である。

埋土　暗褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる。

屋内施設　主柱穴・柱穴・周壁溝・中央土坑を検出した。

主柱穴　計11穴検出されている。先述したように、これらの柱穴間には切り合い関係が認められ、少なくとも１回の建て替えが考えられる。柱穴間の切り合い関係および柱穴間の距離から、Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ９・Ｐ11が当初（SH14古）の主柱穴、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10が建て替え後（SH14新）の主柱穴と考えられる。つまり、当初は主柱穴が５穴であったものが、建て替え後には主柱穴が６穴に変化している。

SH14古　Ｐ２は、掘り方径30㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ38㎝を測る。Ｐ４は、掘り方径27㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ61㎝を測る。Ｐ６は、掘り方径29㎝、柱痕径11㎝、床面からの深さ26㎝を測る。Ｐ９は、掘り方径30㎝、柱痕径11㎝、床面からの深さ23㎝を測る。Ｐ11は、掘り方径28㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ41㎝を測る。

柱穴間の距離は、Ｐ２－Ｐ４間で3.50ｍ、Ｐ４－Ｐ６間で3.40ｍ、Ｐ６－Ｐ９間で4.00ｍ、Ｐ９－Ｐ11間で2.90ｍ、Ｐ11－Ｐ２間で3.20ｍを測る。

SH14新　Ｐ１は、掘り方径35㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ38㎝を測る。Ｐ３は、掘り方径31㎝、柱痕径12㎝、床面からの深さ57㎝を測る。Ｐ５は、掘り方径27㎝、柱痕径11㎝、床面からの深さ46㎝を測る。Ｐ７は、掘り方径27㎝、柱痕径10㎝、床面からの深さ21㎝を測

る。Ｐ８は、掘り方径27cm、柱痕径11cm、床面からの深さ44cmを測る。Ｐ10は、掘り方径27cm、柱痕径11cm、床面からの深さ36cmを測る。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ３間で2.50m、Ｐ３－Ｐ５間で3.10m、Ｐ５－Ｐ７間で2.30m、Ｐ７－Ｐ８間で3.40m、Ｐ８－Ｐ10間で2.8m、Ｐ10－Ｐ１間で3.20mを測る。

柱　穴　中央土坑の東側（Ｐ12）と西側（Ｐ13）で検出されている。Ｐ12は、径38cmを測り、床面からの深さは10cmを測る。Ｐ13は、径38cmを測り、床面からの深さは27cmを測る。

周壁溝　北側で１箇所途切れるが、他は全周する。床面における幅18cm、底部幅５cm、床面からの深さ２～３cm、検出面からの深さ５～10cmを測る。

中央土坑　１基検出した。平面形は長楕円形を呈する。主軸方向で1.06m、その直交方向で52cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における床面からの深さは55cmを測る。

埋土は３層からなり、下層から黄灰色極細砂質シルト、暗灰色シルト質極細砂、灰色シルト質極細砂の順に堆積している。なかでも中層には炭が多量に含まれていた。また、上層にも土器の細片とともに炭が若干含まれていた。

埋土内からは、甕（745）と鉢壺（746）が出土している。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　甕と鉢壺が出土している。両個体とも中央土坑から出土したものである。

甕　底部から体部下半にかけての土器である。底部内外面とも指ナデ調整により仕上げられているが、体部については磨滅の為観察できない。

鉢　壺　内面をハケ調整後ナデ調整により、他はナデ調整により仕上げられている。口縁部を欠くが、上端部に紐穴の一部が残存する。

石　器　約60ｇのサヌカイトの剥片が出土しており、そのうちＳ73～Ｓ75を図化している。Ｓ73・Ｓ74は楔形石器である。Ｓ73は3.0ｇ、Ｓ74は5.3ｇである。Ｓ75の大型の削器は上端を研磨およびエッジ研磨している。長さ7.2cm、幅2.9cm、厚さ８mm。重さ17.6ｇである。

Ｓ76はＰ12から出土しているサヌカイト製の石包丁である。全体の形状は半月形で、直線刃の石包丁を模したような形である。縦長剥片を素材とし、背部に刃つぶし状の二次加工をしている。また、刃部にはややステップ状の粗雑な平坦剥離が行われており、使用痕らしい磨耗がみられる。長さ13.55cm、幅4.5cm、厚さ0.75cm、重さ70.3ｇである。

Ｓ77は珪化木製の石包丁である。全体の形状は斜辺が不等な台形に近い。直線的な背部には自然面が残る。刃部はくの字形をしており、エッジに光沢がみられ、使用痕の可能性がある。長さ13.6cm、幅6.3cm、厚さ1.05cm、重さ114.0ｇである。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＨ１５（図版130～144　写真図版89・90・142～149・187・188）

検出状況　調査区の西側、SH14とSH16の間で検出している（第142図）。SD121によって切られ、SK165を切っている。遺構の残存状況は良好である。

形状・規模　平面形は円形を呈する。主柱穴の方位はＮ24°Ｅである。

規模は直径7.06mで、北西－南東方向に長く7.32m、北東－南西方向に短く6.92mである。検出面から床面までの深さは53cmで、床面の標高は6.40mである。

検出した床面積は39㎡を測る。

埋　土　中央土坑の部分を除いて、５層にわたって堆積している。

上層から順に、第１層は黒色シルト質極細砂で、若干土器を含んでいる。第２層は褐灰色シルト質極細砂で土器を含まず、炭を多く含んでいる。第３層は褐灰色シルト混じりシルト質極細砂で土器を多く含んでいる。第４層はにぶい黄褐色シルト質極細砂で土器をあまり含まない層である。第５層は部分的に認められた層で、周壁溝付近から外側で確認された層である。周壁溝ににはこの第５層と第２層が堆積している。

なお、本住居跡から出土した土器のほとんどは第３層からの出土である。すなわち、この層から出土した土器は住居が廃絶した後、ある程度住居跡が埋没してゆるい窪地状になっている段階にあたるものであり、直接本住居跡の時期を示すものではない。

よって土器の取り上げについてはこの第３層を基準としており、この層を含めてそれ以上から出土した遺物については「上層」としてまとめ、それ以下から出土した遺物については「下層」としている。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑が検出された。

柱　穴　主柱穴の４穴のみ検出している。Ｐ１は掘り方径53㎝、柱痕径21㎝、床面からの深さ47㎝を測る。Ｐ２は掘り方径58㎝、柱痕径29㎝、床面からの深さ59㎝を測る。Ｐ３は掘り方径48㎝、柱痕径20㎝、床面からの深さ53㎝を測る。Ｐ４は掘り方径59㎝、柱痕径29㎝、床面からの深さ58㎝を測る。以上の４穴が主柱穴を構成するものと考えている。

主柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が3.32ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が3.40ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が3.32ｍ、Ｐ４－Ｐ１間が3.52ｍである。

出土状況　また、各主柱穴から土器が出土している。いずれも柱の抜き取り後の穴に人為的に入れた状態で出土している。完形の状態のものと、破片のものの両者がある。

Ｐ１からは甕（748）の上半分が口縁部を下に向けて置かれていた。また、柱穴の底には５×５×10㎝程度の石が置かれており、根固めの石である可能性がある。Ｐ２からは壺（749）の口頸部と高坏（750）がほぼ完形で出土した。壺は口縁部を上に向けて置き、その上に高坏を横に向けて置いている。Ｐ３からは器台（751）の口縁部が出土した。点数は多いが、いずれも破片で出土しているため図化できたものは１点のみである。Ｐ４からは完形の有孔土器（752）と、器種不明の底部片（753）が出土している。底部片が下で、その上にほぼ接するように有孔土器が斜め向きに置かれている。

周壁溝　全周して検出され、円形であるが、北側の一部がやや内側に窪んでいる。住居跡の壁より30㎝程度内側で検出されている。規模は床面での幅20㎝、底の幅８㎝、検出面からの深さ48㎝、床面からの深さ10㎝を測る。

中央土坑　住居跡の中央で１箇所のみ検出された。ゆるく２段に掘られており、上方は平面形が隅丸方形で、一辺が80㎝、深さ５㎝で、下方は平面形がやや歪んだ円形で、直径70㎝、深さ20㎝である。床面から土坑底までの深さは28㎝を測る。面積は0.64㎡で、対床面積比は1.6％である。

埋　土　上下２層に分かれており、上層は褐灰色極細砂混じりシルト質極細砂、下層は暗灰色シルトである。下層は若干黒く濁っているものの、炭そのものは確認できなかった。

土坑内には完形の直口壺（747）が置かれていた。口縁部を南東方向に向けて横たえ、口縁部付近の下には偏平な石が2個置かれていた。他にガラス玉（Ｊ３）が出土している。

出土遺物　出土層位が、住居跡の下層から出土した遺物、柱穴・中央土坑などの屋内施設から出土した遺物、住居跡の上層から出土した遺物の3つに分かれる。

下　層　完形に復元できるものもあるが、全体に遺存状況は悪い。甕・壺・高坏・鉢が出土している。

甕　底部片が出土しているが、小片であるため全体の形状は不明である。

壺　口縁部・頸部・底部の破片が出土している。757の口縁部外面には凹線に挟まれた上向きの鋸歯紋が巡らされる。759は体部と頸部の境に断面三角形の突帯を貼り付けている。

高　坏　完形に復元できた2個体と脚部・口縁部の破片が出土している。760は皿状の浅い坏部をもち、その底には円板を充填している。761の坏部と脚部の接合法は付加挿入法である。

764～769は脚部の破片で、脚柱部が太く中空で、底部に円板を充填しているものと、脚柱部が細く裾部が上方から緩やかに開くものの両者がある。

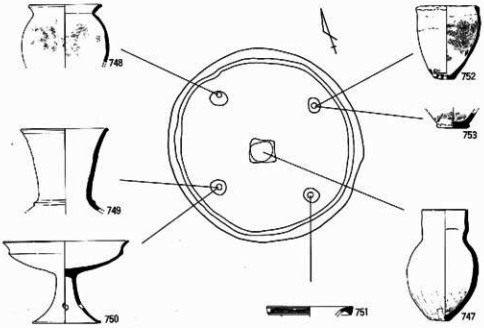
鉢　763は鉢と思われる底部片で、コップ状を呈している。外面に縦方向のハケ目が、底部付近の外面には沈線状の窪みが認められる。

屋内施設　土器・玉が出土した。

土　器　甕・壺・高坏・有孔土器・底部片が出土した。

甕　748は上半分のみで、全体に磨滅している。体部の調整は内外面とも縦方向のハケ目で、口縁部外面には指オサエの痕跡が認められる。

壺　747は長頸壺である。口頸部は短く、体部の半分ほどしかない。体部と頸部の接合部はやや窪んでいる。調整は全体に磨滅しているため詳細には観察できない。頸部内面には粘土の接合痕が認められる。749は大型の長頸壺で、口頸部のみ出土した。体部との境には



第144図　SH15（屋内施設）土器出土状況

断面三角形の貼り付け突帯が巡る。口縁部付近の外面には1条の凹線が巡る。調整は磨滅のため不明である。751は広口壺で、口縁部のみ図化できた。端部に凹線に挟まれた波状紋が巡らされる。

高　坏　750は完形に復元できた。磨滅のため調整は不明である。脚部には円形の透かしが4箇所に認められる。

有孔土器　752は底部に2箇所の穿孔が認められる。調整は、体部外面の上半は磨滅のため不明であるが、底部付近に縦方向のハケ目が認められる。体部内面は左上がりのハケ目であるが、底部付近は磨滅のため不明である。全体に歪である。

底　部　753は器種は明確にできない。底は全体に歪んでおり、平らではない。

玉　青色のガラス玉で、高さ3㎜、幅4.5㎜、穴の直径1㎜を測り、重さは0.03ｇである。

上　層　土器・石器が出土している。

土　器　甕・鉢・壺・高坏・器台が出土している。

甕　5個体が完形に復元できた。770は分割成形技法によるものである。タタキの後縦方向のハケにより調整される。774には粘土紐の接合痕が認められる。

口縁部から体部が残っているものは775～799がある。口縁部の形態は丸いものがほとんどであるが、外側を向く面をもつもの（775・781・795・799）、斜め上方を向く面をもつもの（776～778・780・793）などがある。体部外面の調整は右上がりのタタキがほとんどで、その後に縦方向のハケメ、あるいは板ナデが認められ、791については斜め方向のヘラナデが認められる。内面の調整は横方向のハケ目がほとんどであるが、781では板ナデである。口縁部の調整はヨコナデがほとんどで、確認できたもののなかでは唯一781のみが横方向のハケ目である。

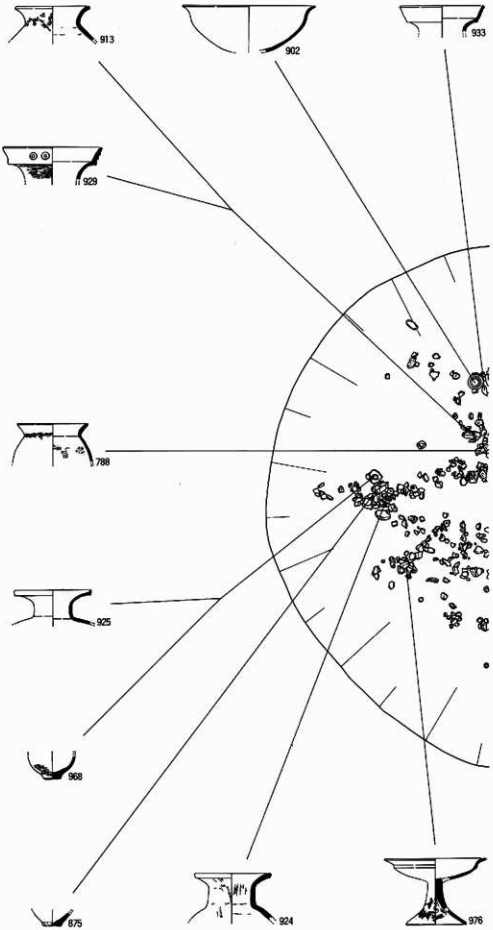
胴部下半から底部が残っているものは800～880がある。やや突出するものがほとんどで、それ以外には、平らな底部から突出することなく胴部が製作されているもの（829・833・841）や、底部がほとんど突出しないもの（880）も存在する。外面の調整は右上がりのタタキがほとんどで、その後縦方向のハケ目の認められるもの、縦方向の板ナデが認められるものがある。また、比較的小さいものの中には底部付近に指頭圧痕が残るものもある。内面の調整は縦方向のハケ目あるいは板ナデが大半で、底部にはクモの巣状のハケ目が認められるものもある。また製作技法として底部輪台技法によるものも認められる。

小形の甕には881～885がある。881は完形に復元できた。882の体部は大きく張り出しており、やや歪である。

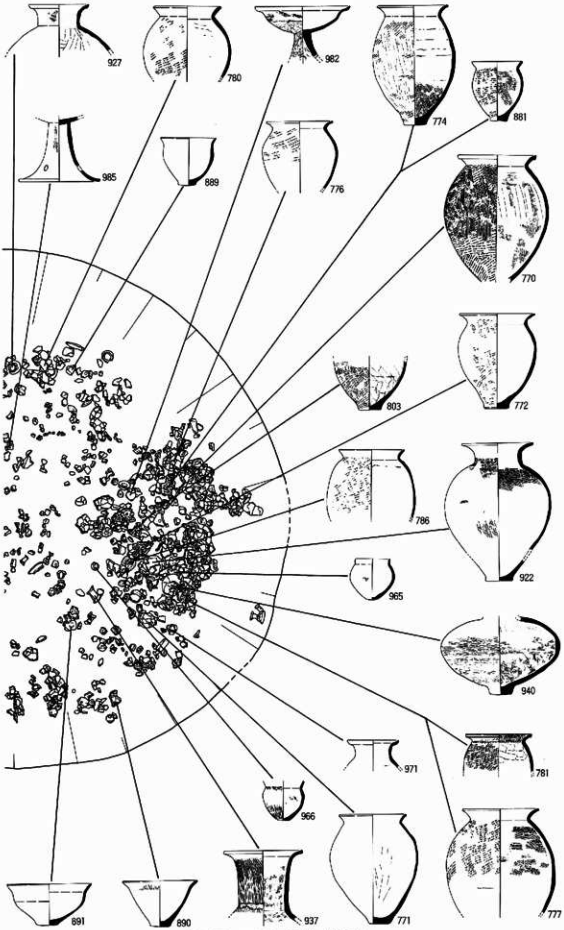
鉢　886～888は有孔鉢である。いずれも焼成前に穿孔されており、888は7箇所認められる。調整は887のみ明瞭に認められ、外面が縦方向のハケ目、内面がやや傾いたハケ目である。

889は小型の甕に近い形態である。890は口縁部外面付近に縦方向のハケ目が認められる。893は甕の下半と同じ形態で、調整も外面が右上がりのタタキ、内面が縦方向のハケ目と共通している。894～898は底部の破片のみで詳細は不明であるが、短い脚を有するものである。

大型の鉢には、「く」字状を呈する口縁部をもつ899～901と、体部が椀状を呈する902～904、体部が膨らんだ905～908がある。



第145図　SH15上層土器出土状況（1）



第146図　SH15上層土器出土状況 (2)

壺　いずれも破片で、完形に復元できたものはほとんどない。広口壺、二重口縁壺、長頸壺細頸壺、短頸壺がある。

広口壺には、頸部が明瞭でないもの、頸部で直立するものの大きく2者がある。前者はさらに口縁部が直線的に開く909～911、緩く外反する912～917、大きく外反する918～920がある。いずれもハケ目調整で、外面が縦方向、内面が横方向である。口縁端部に面をもつ918や920もある。921は小片であるため詳細は不明であるが、肩部に竹管紋が認められる。後者の頸部が直立するものには922～927がある。そのうち922はほぼ完形に復元できた。

また、小型のものとして969・971がある。971には粘土紐の接合痕が認められる。

二重口縁壺は929～936があり、口縁部外面に竹管紋のある円形浮紋によって加飾されている929・930も認められる。

長頸壺は937・938の2点が確認できた。941も長頸壺となる可能性がある。

細頸壺は939と940の2点が確認できるが、底部片の中にも細頸壺となるものがあると思われる。940の内面下半には縦方向のハケ目と共に横方向の工具痕が認められる。

941～964は、壺の破片と思われるが、小片であり全体の形状は不明である。

短頸壺は直口の965と若干外傾する966がある。

高　坏　975と976の2点のみほぼ完形に復元できた。975の坏部と脚部の接合法は挿入付加法である。円形の透かしが4方に認められる。976は中実の脚部で、破損状況から判断して挿入付加法によって製作されたものと思われる。

977～984は口縁部から体部の破片である。口縁部が大きく外反する977・979、直線的に外傾する978・980、深く内彎する体部をもち、口縁部で外反し、端部で上方へ屈曲させる981～983がある。984についてもこの形態になる可能性が高い。調整は982と984でのみ確認できる。体部内面については不明であるが、984のみ縦方向のミガキが確認できる。

985～1018は脚部の破片である。太く中空で、円板を充填している985・986や、その可能性のある987～993と、中実のものの大きく2つに分けることができる。前者の調整は987と988のみ確認でき、外面が縦方向のヘラミガキである。後者の調整は種々認められる。まず外面であるが、996・1011・1014は縦方向のミガキ、1009は縦方向のハケ目、内面は991が縦方向のハケ目、1015が斜め方向のハケ目、996が横方向のケズリで、これら以外にしぼり痕の認められるものがある。

器　台　1019～1025があるが、1019と1020以外は破片のため、器台ではない可能性もある。1019は中央に円形の透かしを1方向のみ開けている。1020も同様の形態であるが、やや小さく穿孔は認められない。脚部の端部付近に沈線状の窪みが認められる。

1021は壺の口縁部である可能性があるが、大きく開いており、器壁が薄いことから器台の脚部として図化した。端部の面には波状紋が巡らされる。1022～1025についても壺の口縁部である可能性もある。円形浮紋や竹管紋のある円形浮紋などにより加飾されており、1024や1025には凹線紋や波状紋も認められる。

その他　器種が不明である1026、混入品と思われる1027、把手片の1028・1029がある。

1026は円錐形をした中空の土器片である。1027は脚部片で、円板充填法により製作されて

いる。

石　器　Ｓ78・Ｓ79は磨石または投彈である。石材はＳ78は石英安山岩、Ｓ79は流紋岩質火砕岩である。Ｓ78は小ぶりの卵形で、わずかに磨った痕跡が残る。長さ5.15cm、幅4.45cm、厚さ3.85cm、重さ114.7ｇ。Ｓ79はほぼ球形である。長さ2.55cm、幅2.3cm、厚さ2.25cm、重さ16.7ｇ。

Ｓ80は太型蛤刃石斧の一部である。石材は深緑色で斑入りの角閃岩である。残存長5.95cm、幅4.3cm、厚さ3.6cm、重さ143.2ｇ。

この他、サヌカイトが母岩622.7ｇを含む656.6ｇが出土している。

時　期　出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＨ１６（図版145　写真図版91）

検出状況　調査区の東北側で検出している（第142図）。北側は調査区外に延びているため約１/３が不明である。切り合い関係は認められない。住居跡の南西隅に接しSK169が検出されているが、時期は異なる。

住居跡南辺において、内側の周壁溝が外側の周壁溝を切っており、部分的に住居面積を縮小・補修していることがわかる。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなす。主柱穴の方位は真北である。

規模は唯一確認できる南辺で一辺5.70ｍを測る。検出面から床面までの深さは48cmで、床面の標高は6.74ｍである。検出した床面積は18.43㎡であるが、本来は30㎡ほどあったものと思われる。

埋　土　中央土坑の部分を除いて上層が青黒色シルト質極細砂、下層が黒褐色シルト質極細砂が堆積しており、両層とも土器・炭を含んでいる。上層は住居跡中央部のみの堆積で、周壁溝は下層が堆積している。

上層から壺の底部（1031）と少量のサヌカイト片が出土している。

屋内施設　柱穴・周壁溝・中央土坑・土手・高床部が検出された。

柱　穴　合計３穴検出されたが、本来は４穴であると考えられる。Ｐ１は掘り方径37cm、柱痕径18cm、床面からの深さ49cmを測る。Ｐ２は掘り方径40cm、柱痕径19cm、床面からの深さ46cmを測る。Ｐ３は掘り方径40cm、柱痕径16cm、床面からの深さ30cmを測る。以上の３穴（本来は４穴）が主柱穴を構成するものと考えているものである。

主柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間で2.50ｍ、Ｐ２－Ｐ３間で2.38ｍを測る。

Ｐ３から土器片が出土している。

周壁溝　周壁溝は検出された範囲では全周している。床面での幅12cm、底の幅５cm、検出面からの深さ５cm、床面からの深さ３cmを測る。

南側では２本の周壁溝が検出されており、内側が外側を切っている。全体に内側の周壁溝の方が若干細い。

中央土坑　土坑Ｂと焼土面が認められる。

土坑Ｂ　焼土面の北側に位置しており、平面形は隅丸方形で、規模は長さ80cm、幅80cm、深さ19cmを測る。埋土は下層が明黄褐色シルト質極細砂、上層が緑黒色シルト質極細砂で径２

～3㎝の焼土塊がブロック状に混じっている。

焼土面　土坑Bと土手の間の空間で2箇所認められた。規模は2箇所とも20㎝×20㎝で、隅丸方形を呈する。

土　手　土坑Bと焼土面を囲むように認められ、平面形は隅丸方形で、断面形は台形である。床面との比高差は4㎝で、底部の幅14㎝を測る。土手に囲まれた部分で甕の底部（1030）が出土している。

土手に囲まれた面積は1.25㎡で、復元した床面積との対床面積比は4％である。

高床部　周壁溝にそって全周する。規模は、幅95㎝、床面からの比高は6～10㎝、復元される面積は9.72㎡を測り、対床面積比は32％である。住居跡の中央部を方形に掘り込むことにより、高床部がつくられている。高床部の内側には幅20㎝の溝が巡っており、住居跡中央床面から3㎝ほど下がっている。高床部直上から1032が出土している。

また、高床部西辺の南端には深さ約3㎝ほどの窪みがある。平面形は隅丸方形に近く、西側は周壁溝の手前までで止まっている。この窪みから高坏（1033）が出土した。

出土遺物　土器とサヌカイト片が出土した。

土　器　遺存状況は良好ではなく、小片が出土しているのみである。甕・壺・高坏が出土している。

甕　底部片の1片のみである。外面は底部付近まで右上がりのタタキが認められる。内面はいわゆるクモの巣状のハケ目が認められる。

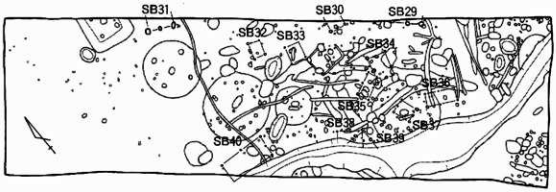
壺　底部片の1031と頸部から体部にかけての1032がある。1031はやや突出した底部をもつ。内面にはクモの巣状のハケ目が認められる。

高　坏　脚部の1033のみである。中実の脚部であるが、全体の形状は不明である。

石　器　サヌカイト片が0.8ｇ出土したのみである。

時　期　出土遺物より弥生時代後期と考えられる。

Ⅱ．掘立柱建物跡



第147図　Ⅴ区第２面　掘立柱建物跡

ＳＢ２９（図版147）

検出状況　Ⅴ区の北東辺の東よりで一辺分の柱列を検出している（第147図）。調査区外へも続いている。

形状・規模　Ｎ40°Ｅに棟軸方向をとる、桁行２間以上、梁行１間以上からなる建物である。南西側桁行方向で3.60ｍを測る。桁行方向の平均柱間距離は1.8ｍである。

柱　穴　掘り方の平面形は全て方形からなり、その規模は一辺54～57㎝を測り、比較的そろっている。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向はほぼ一致している。深さは23～39㎝である。掘り方内は褐灰色系の埋土からなる。柱痕は確認できなかった。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　柱穴掘り方の平面形から判断して、奈良時代～平安時代と考えられる。

ＳＢ３０（図版147）

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第147図）。SH12の北東側に位置するが、明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　東西方向に２間、南北方向に１間分検出したのみで、多くは調査区外までのびるものと考えられ、全体の規模は明確にできない。南北方向の柱穴を基準とすると、棟軸方向はＮ10°Ｅを指向する。

東西方向の２間で1.95ｍを測り、柱穴間の平均距離は98㎝である。南北方向の１間は1.14ｍを測る。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径18～38㎝、検出面からの深さ12～34㎝を測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　Ｐ３とＰ４から弥生時代前期と考えられる土器片が出土している。１点は壺の一部と考えられるが、小片のため図化できなかった。

時　期　出土土器から弥生時代前期にかさのぼる可能性が考えられる。

ＳＢ３１（図版147・149）

検出状況　北東辺の中央よりやや西で、一辺分の柱列を検出している（第147図）。調査区外へも続いている。

形状・規模　N20°Eに棟軸方向をとる、桁行2間、梁行2間以上からなる建物である。南側桁行方向で3.44mを測る。桁行方向の平均柱穴間距離は1.72mである。

柱　穴　掘り方の平面形は方形または円形からなり、その規模は中央のP1が30cmと小さく、両脇は一辺56−58cmを測る。個々の柱穴の主軸方向と棟軸方向はほぼ一致する。深さは18〜50cmである。掘り方内は黒褐色系の埋土からなる。一穴を除き柱痕を確認することができ、その径は13〜18cmである。

出土遺物　P1から壺と甕が出土している。

壺　図化できたのは1034の1個体のみである。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中に4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　1035〜1037の3個体図化したが、口縁部の1035・1036は小片のため径を復元することはできなかった。両個体とも内外面をナデ調整により仕上げられている。1035の頸部外面には4条＋αのヘラ描沈線紋が描かれている。ただし、磨滅が著しいためその本数については明確にできない。1037の底部も、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して弥生時代前期と考えられる。

SB32（図版147）

検出状況　当調査区中央部北東側に位置する（第147図）。SK164の東側、SK168の北側に位置するが、当建物と明確に切り合う遺構は認められない。

形状・規模　N20°Eに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行2間の掘立柱建物であるが、東桁行方向の中央の柱穴を欠く。北梁行方向で1.56m、南梁行方向で1.52m、西桁行方向で2.16m、東桁行方向で2.10mを測り、建物の面積は3.20m²である。西桁行方向における柱穴間の平均距離は1.08mである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径24〜38cm、検出面からの深さ15〜25cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　弥生時代の土器片が出土しているが、いずれも小片のため、図化はおろか器種の特定も困難である。胎土の特徴から、弥生時代前期までは遡らないものと考えられる。

時　期　出土土器の特徴から、弥生時代、なかでも弥生時代中期以降と考えられる。

SB33（図版147）

検出状況　当調査区中央部北東側に位置する（第147図）。SB32の南東側、SK168の東側、SD119の北側に位置する。SK169・SK170と平面的に重複するが、前後関係については明確にできない。

形状・規模　N15°Eに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行1間の掘立柱建物である。北東隅の1穴を欠く。南梁行方向で1.96m、西桁行方向で2.25mを測り、面積は4.45m²と復元される。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径18〜20cm、検出面からの深さ22〜31cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　P1とP3から須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。P1出土の須恵器は平安時代の椀であるが、より詳細な時期を特定することはできない。P3出

土の須恵器については、器種の特定も困難である。

時　期　出土土器から判断して、平安時代と考えられる。

ＳＢ３４（図版147・149　写真図版150）

検出状況　当調査区中央部よりやや北東側に位置する（第147図）。SB35の東側に位置する。SK135・SK145・SD111と切り合い関係にあるが、調査においてはその前後関係を明確にすることはできなかった。

形状・規模　Ｎ15°Ｅに棟軸方向をとる、梁行２間、桁行２間の掘立柱建物である。ただし、南東隅の１穴を欠く。北梁行方向で2.33m、西桁行方向で3.24mを測り、建物の面積は7.20㎡と復元される。柱穴間の平均距離は、北梁行方向で1.15m、西桁行方向で1.60mを測る。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径16～42cm、検出面からの深さ31～32cmを測る。柱痕は検出されなかった。

出土遺物　Ｐ５から壺の口縁部片（1038）が出土している。広口壺の口縁部と考えられ、内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には１条のヘラ描沈線紋を描き、この後これに直交するように刻み目が施されている。また、口縁部内面には３条と４条からなる突帯を渦巻状に貼り付けている。胎土中には５mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　Ｐ５から出土した土器から判断すると、弥生時代前期と考えられる。

ＳＢ３５（図版148）

検出状況　当調査区中央部よりやや北東側に位置する（第147図）。SB34の西側に位置する。SK145～SK149と平面的に重複するが、その前後関係は明確にできない。他に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　Ｎ65°Ｅに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。東梁行方向で1.10m、西梁行方向で2.05m、北桁行方向で3.05m、南桁行方向で3.06mを測り、建物の面積は4.17㎡である。桁行方向における柱穴間の平均距離は1.53mである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径16～30cm、検出面からの深さ15～33cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　Ｐ３から弥生土器片が出土しているが、図化はおろか器種の特定も困難である。胎土の特徴から、弥生時代中期以降と考えられる。

時　期　出土土器の特徴から、弥生時代のなかでも弥生時代中期以降と考えられる。

ＳＢ３６（図版148）

検出状況　当調査区北東部で検出した（第147図）。SD111の南西に位置し、本来はSD111と切り合い関係にあるものと考えられるが、その前後関係はわからない。他にSD110とも切り合い関係にあるが、その前後関係も明確にできない。またSD112とも平面的に重複するが、その前後関係も明確にできない。

形状・規模　Ｎ64°Ｗに棟軸方向をとる、梁行１間、桁行２間の掘立柱建物である。ただし、北東隅の１穴を欠く。北西梁行方向で1.66m、南西桁行方向で3.86mを測り、建物の面積は

6.25㎡と復元される。南西桁行方向における柱穴間の平均距離は1.93mである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径14～36cm、検出面からの深さ10～35cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　P1とP4から弥生時代の土器が出土しているが、いずれも図化はおろか器種の特定も困難である。胎土の特徴から、弥生時代中期以降と考えられる。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代のなかでも弥生時代中期以降と考えられる。

ＳＢ３７（図版148）

検出状況　当調査区北東部で検出した（第147図）。平面的にはSH11と重複するが、その前後関係は明確にできない。他に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　N20°Wに棟軸方向をとる、梁行２間、桁行１間の掘立柱建物である。ただし、南梁行方向の中央の柱穴を欠く。北梁行方向で1.88m、南梁行方向で1.80m、西桁行方向で2.26m、東側桁行で2.24mを測り、建物の面積は4.25㎡である。北梁行方向における柱穴間の平均距離は94cmである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径20～42cm、検出面からの深さ17～26cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　各柱穴内から弥生土器と考えられる土器片が出土している。いずれも器種・時期を特定できるものではない。ただし、胎土の特徴から弥生時代中期以降のものと考えられる。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代のなかでも弥生時代中期以降と考えられる。

ＳＢ３８（図版148）

検出状況　当調査区北東部南側で検出した（第147図）。SB37の西側に位置する。また、後述するようにSB39と平面的にほぼ一致する。しかし、当建物との前後関係は明確にできない。南西側をSD98に切られている。

形状・規模　先述したように大半をSD98により切られているため、建物の規模を明確にすることはできない。このため、梁行方向・桁行方向ともに不明確である。北西－南東方向に２間、その直交方向に１間検出している。

北西－南東方向を基準とするとN40°Wに棟軸方向をとる。この方向の距離は3.10mを測り、その直交方向の１間の距離は1.34mである。残存する建物の面積は3.75㎡である。北西－南東方向の柱穴間の平均距離は1.55mである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径20～26cm、検出面からの深さ13～24cmを測る。柱痕は検出できなかった。

出土遺物　各柱穴内から弥生土器が出土している。いずれも小片のため図化はおろか器種・時期の特定も困難である。ただし、P３出土土器については弥生時代後期の可能性が考えられる。他の土器片についても、胎土の特徴から弥生時代中期以降と考えられる。

時　期　出土土器の特徴から、弥生時代後期を中心とした時期を考えたい。

ＳＢ３９（図版149）

検出状況　平面的にはSB38とほぼ重複する位置にある（第147図）。ただし、SB38との前後関係は明確にできない。また、SB38同様南西側の大半をSD98に切られている。

形状・規模　上記のように大半をSD98に切られているため、建物の規模を明確にすることはできない。このため、梁行方向・桁行方向を明らかにすることもできない。

東西方向・南北方向ともに１間分を検出している。その距離は、東西方向で1.20ｍ、南北方向で1.30ｍである。

柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径38～42cm、検出面からの深さ22～24cmを測る。柱痕は検出されなかった。

出土遺物　各柱穴内から弥生土器が出土している。いずれも小片のため時期および器種の特定は困難である。ただし、胎土の特徴から、Ｐ１出土土器は中期以降、Ｐ２・Ｐ３出土土器は前期と考えられる。

時　期　出土土器から判断すると弥生時代前期と同中期以降と考えられる。ここでは、新しい方をとり、弥生時代中期以降と考えたい。

ＳＢ４０（図版149）

検出状況　当調査区のほぼ中央部南西側に位置する（第147図）。SB38の西側、SK172の西側に位置する。SK175・SK176・SK186・SD121と平面的に重複するが、その前後関係は明確にできない。また、当建物の一部（南西隅）は調査区外にあるものと考えられる。

形状・規模　Ｎ100°Ｅに棟軸方向をとる、梁行２間、桁行２間の掘立柱建物である。ただし、南西隅と南桁行方向の中央部の柱穴を欠く。東梁行方向で2.74ｍ、北梁行方向で6.10ｍを測り、建物の面積は16.7㎡と復元される。柱穴間の平均距離は、東梁行方向で1.37ｍ、北桁行方向で3.05ｍである。

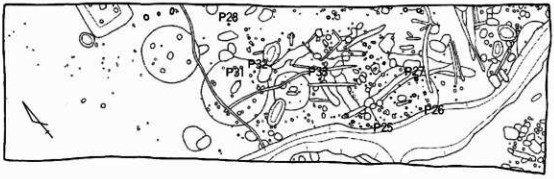
柱　穴　掘り方の平面形は円形を呈する。掘り方の径19～38cm、検出面からの深さ13～20cmを測る。柱痕は検出されなかった。

出土遺物　Ｐ３・Ｐ４内から弥生土器が出土している。いずれも小片のため図化はもちろん器種・時期の特定も困難である。胎土の特徴から弥生時代中期以降と考えられる。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代のなかでも中期以降と考えられる。

Ⅲ．柱　穴

建物に復元することができなかった柱穴のなかに、比較的良好な状態で遺物が出土しているものが認められる。以下、これらの柱穴から出土した遺物について報告する。



第148図　V区第2面　柱穴

Ｐ２５（図版150）

出土遺物　1045は須恵器の坏蓋である。口縁端部が欠けている。推定口径14.05㎝、高さ3.0㎝。つまみは低いが、宝珠形の特徴を残している。天井部は平坦で、内面には不定方向の仕上げナデが残る。

時　期　出土遺物から奈良時代前半と考えられる。

Ｐ２６（図版150）

出土遺物　蓋（1041）が１個体出土している。つまみは指オサエとナデ調整により、他は内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には４㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

Ｐ２７（図版150）

出土遺物　須恵器の椀の底部（1047）が出土している。底部を回転糸切りにより切り離し、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して、11世紀後半と考えられる。

Ｐ２８（図版150　写真図版92・150）

出土遺物　壺（1040）と甕（1044）が出土している。

壺　底部から体部中位にかけて残存する土器である。底部は内外面とも指オサエにより、体部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には４㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　口径41.4㎝と復元される比較的大型の甕である。内面はナデ調整により、外面はハケ調整により仕上げられている。ハケ調整後、頸部に４条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には３㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

Ｐ３１（図版150　写真図版150）

出土遺物　壺（1039）が出土している。口頸部片と肩部からなり、両者は直接接合しないが、胎土・色調等の特徴から同一個体と判断した。内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部外面にはヘラ先を櫛状に束ねたものによる５条からなる帯状沈線が３帯描かれている。直線紋であるが、稚拙で大きく歪んでいる。肩部には、頸部と同じ施文原体により、上から直線紋、流水紋、直線紋、波状紋、直線紋の順に各１帯ずつ描かれている。ただし、流水紋については、施文原体が他とは異なり、櫛描による可能性が高い。胎土中には５㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期初頭と考えられる。

Ｐ３２（図版150）

出土遺物　甕の上半部（1042）と底部片（1043）が出土している。

1042は体部中位から口縁部にかけて残存する土器である。全体的に磨滅が著しく調整等は十分観察できないが、外面にわずかにハケ調整を観察することができる。口縁端部には刻み目が施されている。頸部以下外面に、７条からなる櫛描直線紋が２帯描かれている。胎土中には２㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

1043も磨滅が著しく調整等は十分観察できないが、外面にわずかにハケ調整が認められる。胎土中には３㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

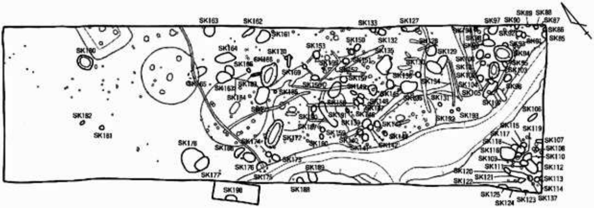
時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期初頭と考えられる。

Ｐ３３（図版150）

出土遺物　須恵器（1046）が出土している。口縁部の傾きおよび端部がわずかに端反り傾向にあることから皿と判断した。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して10世紀～11世紀と考えられる。

Ⅳ. 土　坑



第149図　Ｖ区第２面　土坑

ＳＫ８５

検出状況　当調査区北東隅で検出した（第149図）。当遺構の南端部はSD98と接しているが、ほぼ完存する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、ほぼ南北方向に主軸をとる。主軸方向で84㎝、その直交方向で68㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは18㎝を測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。その層相から人為的に埋められたものと考えられ、炭片や土器の細片が混入していた。

出土遺物　土器と石器の剥片が出土している。

土　器　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　体部の小片が出土している。２条＋αの突帯が貼り付けられている。

甕　口縁部が如意形を呈するものと、逆Ｌ字形を呈するものとが出土している。後者の土器には竹管紋が施文されている。

石　器　サヌカイトの剥片1.8ｇが出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ８６

検出状況　調査区の北東隅に位置する（第149図）。SK85の北東側に接している。東側の一部は調査区外へ延びており不明である。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で43㎝、その直交方向で55㎝を測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは30㎝を測る。底部での規模は長軸方向で40㎝、その直交方向で35㎝を測る。

埋没状況　黒褐色シルト混じり極細砂１層からなる。

出土遺物　特に遺物は出土していない。

時　期　時期の特定は困難である。

ＳＫ８７

検出状況　調査区の北東隅に位置する（第149図）。SK86の北側に位置する。北側の一部が調査区外にのびているため不明である。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で55cm、その直交方向で35cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。底部の規模は長軸方向で33cm、その直交方向で23cmを測る。

出土遺物　土器の小片が出土している。小片のため器種の特定は困難である。胎土中には４mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ８８

検出状況　調査区北東隅で検出している（第149図）。SK87の西、SK89の南東に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する土坑である。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で57cm、短軸方向で47cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　褐灰色シルト質極細砂１層からなる。人為的に埋められたものと考えられ、埋土中には土器の細片や炭片が含まれていた。

出土遺物　甕が出土しているが、小片のため図化できなかった。口縁部の小片で、如意形を呈する。胎土中には５mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ８９

検出状況　調査区北東隅で、SK88の北西に位置する（第149図）。北側の一部は調査区外へのびているため不明である。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で1.00m、その直交方向で37cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。底部の規模は長軸方向で70cm、その直交方向で26cmを測る。

出土遺物　図化できなかったが、壺の頸部片が出土している。ヘラ描沈線が５条描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９０

検出状況　調査区北東隅で検出された（第149図）。SK92の北東、SK89の西側に位置する。当遺構の約１/２は調査区外まで拡がっている。他の遺構との切り合いは認められない。

形状・規模　完存しないため平面形を明らかにすることは困難であるが、楕円形もしくは溝状を呈するものと考えられる。長軸方向で80cmを検出し、短軸方向は61cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。人為的に埋められたものと考えられ、埋土中には炭や土器の細片がわずかに含まれていた。

出土遺物　壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土中には5㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９１

検出状況　調査区北東隅に位置する（第149図）。SK92の北側に位置し、SK92を切っている。

形状・規模　平面形は円形で、長軸方向で70㎝、その直交方向で63㎝を測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは28㎝を測る。底部での規模は長軸方向で40㎝、その直交方向で27㎝を測る。

埋没状況　灰色シルト質極細砂が堆積するが、最下層の１～２㎝は暗灰色の層が堆積していた。

出土遺物　土器の小片がわずかに出土しているが、器種の特定も困難である。胎土中には5㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９２

検出状況　当調査区北東隅で検出した土坑である（第149図）。SK90の南に位置する。SK91に切られており、一部を欠く。

形状・規模　平面形は隅丸方形に近く、長軸方向で69㎝、短軸方向で68㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは13㎝を測る。

埋没状況　灰褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土中には5㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９３

検出状況　調査区東隅付近に位置する（第149図）。SK94の東側にあたり、SK94に切られている。

形状・規模　平面形は円形または楕円形で、長軸方向で75㎝残存し、短軸方向で50㎝を測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは11㎝を測る。長軸はN55°Eを指向する。

埋没状況　黄灰褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　多条のヘラ描沈線紋が描かれた壺の体部片が出土しているが、図化できなかった。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９４（図版152　写真図版93・150）

検出状況　調査区東隅付近に位置し（第149図）、SK95に切られ、SK93を切る。またいくつかの柱穴とも切り合っている。

形状・規模　平面形は楕円形で、長軸方向で2.30ｍ、短軸方向で2.00ｍを測る。横断面は逆台形で、最深部における検出面からの深さは27㎝を測る。長軸はN45°Wを指向する。

埋没状況　４層に分層できる。１・２層は黒褐色シルト質極細砂ないし砂混じりシルトで、土器や炭を含んでいる。３層は黄灰色砂混じりシルトで、最下層の４層は黒褐色シルトである。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　壺・甕・高坏・鉢の各器種が出土している。

壺　直口壺（1048・1050）と無頸壺（1049）が出土している。1048は、内外面とも磨滅のため調整は観察できなかった。1050は、内面をハケ調整、外面をナデ調整により仕上げ、口縁部外面に１条の凹線紋が施されている。1049は、内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。

甕　口縁部片（1052）と底部片（1051）が出土している。1052は、口縁部内外面および体部内面をナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げられている。口縁端部には２条の凹線紋が施されている。1051は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

高　坏　口縁部片（1053）と脚部片が出土しているが、図化できたのは口縁部片のみである。1053は、器表面の磨滅が著しく、内外面の調整は観察できない。

鉢　把手付の鉢（1054）が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられているが、把手を貼り付けた箇所は指オサエの痕が顕著である。

石　器　サヌカイトの剥片６ｇが出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ９５

検出状況　調査区の北東隅に位置する（第149図）。SK94とわずかに切り合い、SK94を切っている。SD106とも切り合い関係にあり、同遺構を切っている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で95cm、短軸方向で61cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。ヘラ描沈線紋あるいは半裁竹管による沈線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ９６

検出状況　当調査区の北東隅に位置し（第149図）、SK95の南西、SK03の南にあたる。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する土坑である。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.06ｍ、短軸方向で83cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。

埋没状況　褐灰色シルト質極細砂１層からなり、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　頸部片が出土している。刻み目突帯が２条＋α貼り付けられている。

甕　口縁部片が出土している。逆Ｌ字形をなし、口縁端部には刻み目が施されている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９７

検出状況　調査区の北東隅に位置し（第149図）、本遺構の一部は調査区外まで拡がるため、全体を検出することはできなかった。

形状・規模　全体を検出していないため平面形を明確にすることは困難であるが、楕円形もしくは溝状を呈していたものと考えられる。長軸方向で1.23ｍ検出し、短軸方向で89㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは39㎝を測る。

埋没状況　３層からなり、下から褐灰色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。各層とも土器および炭の細片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺と甕が出土しているがいずれも小片のため図化できなかった。

壺　体部片・頸部片・底部片が出土している。体部片には櫛描直線紋と櫛描波状紋が描かれている。頸部片には５条＋αの突帯が貼り付けられている。

甕　口縁部片・体部片・底部片が出土している。口縁部片は如意形を呈するものである。体部片には、半截竹管により波状紋と直線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ９８

検出状況　SK99の北側に位置する（第149図）。南側の一部がSK99によって切られている。

形状・規模　平面形は楕円形で、長軸方向で70㎝、その直交方向で60㎝を測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは40㎝を測る。底部での規模は長軸方向で48㎝、その直交方向で33㎝を測る。

出土遺物　壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。５条＋αのヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ９９（図版152　写真図版93・150）

検出状況　調査区の北東隅にあたり、SK94の北側、SK100の東側に位置する（第149図）。SK98と切り合い関係にあり、SK98を切っている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.48ｍ、短軸方向で90㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは33㎝を測る。

埋没状況　４層からなり、下から黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂、黒褐色極細砂混じりシルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積していた。各層中に、土器片および炭片が含まれていたが、特に下から２層目には炭片が多く含まれていた。また、最下層には土器が多く含まれていた。上記４層は、人為的に埋められた層と考えられる。

遺物出土状況　土坑底部にほぼ密着した形で、壺の頸部片を中心に出土している。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　口縁部から体部まで残存する広口壺（1055）と底部（1056・1057）が出土している。
1055は、外面はハケ調整により仕上げられているが、内面については磨滅が著しく観察

できない。頸部外面には約３㎝の間隔をあけて２条の突帯を貼り付け、この突帯間には６条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には４㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

1056と1057の底部片は、いずれも外面をハケ調整、内面をナデ調整により仕上げられている。胎土中には４㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　如意形を呈する口縁部片が２点（1058・1059）出土している。1058は、内外面とも磨滅が著しく調整等は観察できない。1059は、内外面をナデ調整により仕上げられている。頸部には１条のヘラ描沈線紋が描かれている。いずれも、胎土中には５㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１００（図版152　写真図版150）

検出状況　調査区の北東隅にあたり、SK99の西側、SK102の北側に位置する（第149図）。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する土坑である。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.23ｍ、短軸方向で78㎝を測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは38㎝を測る。

埋没状況　２層からなり、下から灰褐色極細砂混じりシルト質極細砂、灰褐色シルト質極細砂の順に堆積している。両層ともに土器片が含まれ、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　広口壺の口縁部が２点（1060・1061）出土している。

1060は、口縁部のみ残存する個体である。内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。端部に刻み目を施した後、１条のヘラ描沈線紋を施している。また、口縁部内面には４条の突帯を貼り付け、最も上側の突帯には刻み目を施している。また、この刻み目が施された突帯は他の突帯よりも大きく造られている。胎土中には３㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

1061は、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。口縁端部に刻み目を施した後、１条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には３㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。４条＋αのヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１０１

検出状況　調査区北東隅に位置し（第149図）、SK100の南東、SK102の北東にあたる。他の遺構との切り合いはなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で63㎝、短軸方向で55㎝を測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは32㎝を測る。

埋没状況　３層からなり、下から褐灰色シルト質極細砂、灰褐色シルト質極細砂、灰褐色極細砂混じりシルト質極細砂の順に堆積している。これらの３層は、その層相から判断して、いずれも人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺の体部片が出土しているが、小片のため図化は困難である。胎土中には4㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK102

検出状況　調査区北東部に位置し（第149図）、SK103の北、SK100の南にあたる。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で70㎝、短軸方向で64㎝を測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは58㎝を測る。

埋没状況　3層からなり、下から黒色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。

出土遺物　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　坏Bが出土している。

土師器　椀の底部片が出土している。見込み部が一段落ち込む平高台を有するもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　期　出土土器から判断して、平安時代後期と考えられる。

SK104

検出状況　調査区北東部に位置し（第149図）、SK103の西、SK105の北西にあたる。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で97㎝、短軸方向で87㎝を測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは9㎝を測る。

埋没状況　暗褐灰色シルト混じり極細砂1層からなる。人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器の小片が出土しているが、器種の特定は困難である。胎土中には4㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK105

検出状況　調査区の北東隅に位置し（第149図）、SK103の南西、SK104の南東にあたる。SK197を切っている。完存する土坑である。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で85㎝、短軸方向で60㎝を測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは28㎝を測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　底部片が出土している。

甕　如意形をなす口縁部片が出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１０６（図版152）

検出状況　調査区の東側に位置する（第149図）。周囲には遺構は認められず、この土坑のみ単独で存在する。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は隅丸方形で、長軸方向で1.50ｍ、その直交方向で55cmを測る。横断面はＵ字形を呈し、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。底部での規模は、長軸方向で1.00ｍ、その直交方向で31cmを測る。

埋没状況　上層に灰褐色極細砂、下層に暗灰色シルト質極細砂が堆積していた。

遺物出土状況　土坑の底に接して土器が出土しているが、いずれも破片である。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　底部１個体（1062）のみである。外面はハケ調整により仕上げられているが、内面は磨滅のため観察できない。胎土中には５mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　如意形を呈する口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１０７

検出状況　調査区南東隅に位置し（第149図）、SK108の東側にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められないが、調査区外まで拡がるため全体を検出することはできなかった。

形状・規模　完存しないため平面形を明確にできないが、長楕円形もしくは溝状を呈するものと考えられる。長軸方向で1.08ｍ検出し、短軸方向は45cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは14cmを測る。

埋没状況　２層からなり、下から灰黄褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積していた。上層には炭片が含まれ、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。広口壺の口縁部で、内面には指頭圧痕紋突帯が、口縁端部には刻み目が施されている。胎土中には４mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１０８（図版153　写真図版150）

検出状況　調査区南東隅に位置（第149図）し、SK107の南西にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は円形を呈し、径50cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは31cmを測る。

埋没状況　２層からなり、下から褐灰色極細砂混じりシルト質極細砂、灰色シルト質極細砂の順に堆積している。埋土中には土器片が含まれ、上層には炭片が含まれていた。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　口縁部片と体部片が出土しているが、図化できたのは1063の体部片に限られる。

口縁部片は広口壺で、口縁端部に刻み目を施した後１条のヘラ描沈線を施している。

1063は肩部の一部である。４条を１単位とする櫛描直線紋２帯が描かれ、その下端に刻

み目を施した突帯が貼り付けられている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には3㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　　口縁部（1065～1067）と底部片（1064）が出土している。

1065は、口縁部を内外面ともナデ調整により仕上げられているが、体部については磨滅のため観察できない。口縁端部に刻み目が、頚部に3条のヘラ描沈線紋が施されている。胎土中には4㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

1066も、1065とほぼ同様の特徴を示すが、頚部のヘラ描沈線紋は4条施されている。

1067は、上記2点の甕とは異なり、口縁部が逆L字形をなす。口縁端部に刻み目が施され、頚部には4条のヘラ描沈線紋が描かれている。内外面とも磨滅のため調整法は観察できない。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１０９

検出状況　　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK110およびSK111と切り合い関係にあり、両遺構を切っている。

形状・規模　　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で99㎝、短軸方向で70㎝を測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは38㎝を測る。

埋没状況　　灰黄褐色極細砂混じりシルト質極細砂1層からなる。炭片・土器片を含む、人為的に埋められた層である。

出土遺物　　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　　体部片と頚部片が出土している。体部片には1条のヘラ描沈線紋が描かれている。頚部片にはヘラ描による流水紋が描かれている。

甕　　口縁部片が出土している。如意形をなすものと逆L字形をなすものとが出土している。後者の頚部には多条のヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１１０

検出状況　　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK109・SK111に切られている。このため、当遺構の一部を欠く。

形状・規模　　一部を欠くため全体の形状を明確にすることはできないが、楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で1.10ｍと復元され、短軸方向は95㎝を測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは30㎝を測る。

埋没状況　　3層からなり、下から暗灰色極細砂混じりシルト、淡黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト混じり極細砂の順に堆積している。各層とも土器・炭片を含み、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　　壺の口縁部・体部・底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。体部片の一つには1条のヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１１１

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK110を切り、SK109・SK112に切られている。このため、当遺構の一部を欠く。

形状・規模　一部を欠くため全体の形状を明確にできないが、平面形は隅丸長方形をなすものと推定される。長軸方向で1.75m検出し、短軸方向で1.19mを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　３層からなり、下から暗褐灰色極細砂混じりシルト、暗褐灰色極細砂質シルト、黒褐色極細砂混じりシルトの順に堆積していた。上層に土器片および炭片が含まれ、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は、端部に刻み目を施した後１条のヘラ描沈線紋を描いている。体部片には、刻み目を施した突帯が２条貼り付けられている。

甕　口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は如意形をなすものである。体部には６条＋αのヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１１２

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK113の北東にあたる。SK111を切っている。調査区外まで広がるため、一部を欠く。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.25mを測り、短軸方向で65cm残存する。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト混じり極細砂１層からなる。埋土中には土器片が多く含まれており、埋土は人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　弥生時代中期の壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。壺・甕とも体部の一部が出土している。

石　器　サヌカイトの剥片4.6ｇと珪化木片(15.5ｇ)が出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代中期と考えられる。

ＳＫ１１３

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK114の東側に接する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で58cm、短軸方向で40cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは28cmを測る。

埋没状況　２層からなり、下から灰黄褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂の順に堆積していた。いずれも人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　須恵器の坏身の口縁部の小片が出土している。

時　期　出土土器から古墳時代後期と考えられる。

ＳＫ１１４

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK113の西側に接する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で63cm、短軸方向で59cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは46cmを測る。

埋没状況　２層からなり、下から黒褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂の順に堆積している。土器の細片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土土器　壺と甕が出土している。

壺　広口壺の口縁部が出土している。弥生時代中期の特徴を示すものである。

甕　体部片が出土している。６条のヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　土器は弥生時代前期と中期のものが出土している。新しい方をとり、弥生時代中期と考えたい。

ＳＫ１１５（図版153）

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK115～SK119の５基の土坑群の中の１基である。当土坑はSK117に切られている。このため、約１/４を欠く。

形状・規模　平面形は、完存しないため明確にできないが、楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で90cm検出し、短軸方向で72cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは32cmである。

埋没状況　２層からなる。下から、褐灰色シルト混じりシルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。両層とも、土器片・炭片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　頸部片・体部片・底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。頸部片には、半截竹管紋が描かれている。

甕　口縁部片（1068）と底部片（1069）が出土している。

1068は、如意形をなす口縁部の小片であるが、口径を復元することはできなかった。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。他の如意形の甕と異なり、口縁部の外反がわずかである。

1069は、外面をハケ調整、内面を指オサエの後ナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１１６（図版153　写真図版151）

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK115～SK119の５基の土坑群の中の１基である。当土坑はSK118・SK119を切っている。完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向で1.95m、短軸方向で1.53mを測る。横断面はU字形に近いが、両側の立ち上がりの傾斜は異なる。最深部における検出面からの深さは54cmを測る。

埋没状況　９層からなる。下から、黒褐色極細砂混じりシルト質極細砂、黄灰色極細砂混じりシルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂、黄灰色シルト質極細砂、黄灰色粗砂混じりシルト質極細砂、黄灰色極細砂混じりシルト質極細砂、褐灰色極細砂混じりシルト質極細砂、褐灰色シルト混じりシルト質極細砂、褐灰色細砂混じりシルト質極細砂の順に堆積している。いずれの層にも土器片および炭片が混入している。各層とも人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　壺・甕・ミニチュア土器他が出土している。

壺　口縁部片・体部片・底部片が出土しているが、図化できたのは底部片（1070）のみである。

口縁部片は広口壺の口縁部と考えられ、端部に刻み目が施されている。体部片は３条＋αのヘラ描沈線紋が描かれたものと、突帯を貼り付けられたものとが出土している。

1070は、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

甕　口縁部片と底部片が出土しているが、図化できたのは1071の底部片のみである。口縁部片は頸部まで残存するもので、頸部に４条のヘラ描沈線紋が描かれるとともに、把手が貼り付けられている。

1071の底部については、形態的には甕の底部と考えられる。しかし、外面をヘラ磨きにより仕上げられていることから、壺の底部の可能性も否定できない。内面はナデ調整により仕上げられている。

ミニチュア　台付鉢のミニチュアと考えられる１個体（1072）で、器高3.95cm、口径5.4cmと小型である。内外面とも指オサエにより仕上げられており、指頭圧痕が顕著である。口縁部には、指頭圧痕が刻み目状に施されている。胎土中には４mm以下の砂粒が多量に含まれている。

その他　上記の土器のほかに、焼土塊が数点出土している。

石　器　サヌカイトの剥片が7.1ｇ出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１１７（図版153　写真図版151）

検出状況　調査区の南東部に位置し（第149図）、SK115～SK119の５基の土坑群中の１基である。当土坑はSK115・SK118を切り、SK119に切られている。このため、一部を欠く。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.25ｍ、短軸方向で65cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。

埋没状況　２層からなる。下から、暗灰色シルト混じり極細砂～細砂、黒褐色シルト混じり極細砂の順に堆積している。上層から土器が出土している。

出土遺物　壺・甕・壷の各器種が出土している。

壺　体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

甕　３個体（1075～1077）を図化した。

1075は、口縁部から体部上半まで残存し、内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、体部上半には10条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1076は完形に復元できる土器である。口縁部内外面はナデ調整、体部外面はナデ調整とハケ調整、体部内面は板ナデ調整により仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、体部上半には1075同様、10条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1077は小片のため口径の復元も困難である。内外面ともナデ調整により仕上げられ、口縁端部には刻み目が施されている。体部上半部には3条のヘラ描沈線紋が描かれている。

蓋　1078の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK118

検出状況　調査区南東隅付近に位置し（第149図）、SK116・SK117に切られている。

形状・規模　切り合いのためもとの平面形は不明である。残存している部分の長軸方向で88cm、短軸方向で77cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは33cmを測る。長軸はほぼ北を指向する。

埋没状況　埋土は2層に分層でき、上層は黒褐色シルトで炭や土器を含み、下層は暗灰黄色砂混じりシルトである。

出土遺物　壺の体部片と逆L字形をなす甕の口縁部が出土している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK119

検出状況　当調査区の南東隅に位置する（第149図）。SK115～SK119の5基の土坑群の中の土坑である。SK117を切り、SK116に切られている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で80cm、短軸方向で58cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは13cmを測る。

埋没状況　暗褐灰色極細砂混じりシルト質極細砂1層からなるが、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺の口縁部片・頸部片・体部片が出土している。口縁部片には、端部に刻み目を施すとともに、頸部付近に1条のヘラ描沈線紋が描かれている。頸部片には4条＋αの刻み目突帯が貼り付けられている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK120

検出状況　調査区の南隅に位置する（第149図）。SK121の北西端を切っており、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形で、長軸方向で87cm、その直交方向で58cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは41cmを測る。底部での規模は長軸方向で48cm、その直交方向で27cmを測る。

埋没状況　上層、下層とも灰色極細砂からなる。

出土遺物　壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれていた。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１２１

検出状況　当調査区南東隅にあたり、SK109・SK111の西側に位置する（第149図）。SK120とSK137に切られている。このため、当土坑の一部を欠く。

形状・規模　平面形は溝状を呈する。長軸方向で３ｍ検出し、短軸方向で67cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmを測る。

埋没状況　褐灰色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。突帯が１条貼り付けられるとともに櫛描直線紋が描かれている。胎土中には４mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１２２

検出状況　当調査区南東隅の土坑群に位置し（第149図）、SK121に切られている。このため、当土坑の一部を欠く。

形状・規模　平面形は一部を欠くため明確にできないが、楕円形もしくは溝状を呈するものと考えられる。長軸方向で85cm検出し、短軸方向で50cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂１層からなる。炭片・土器片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器の細片が出土しているが、器種の特定も困難である。胎土中には４mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　　SK121との切り合い関係および出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１２３

検出状況　調査区の南西端に位置する（第149図）。南側はほとんど調査区外にのびており、検出できたのはごく一部である。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で98cm、その直交方向で19cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは34cmを測る。

出土遺物　壺の頸部片が出土しているが、小片のため図化は困難である。２条＋αの突帯が貼り付けられている。胎土中には３mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１２４

検出状況　調査区の南西隅に位置し（第149図）、SK123とSK125に挟まれている。南側はほとんど調査区外に延びているため、全体の形状は不明である。明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で1.92ｍ、その直交方向で33cmを測る。横断面はＵ字形を

呈し、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

出土遺物　壺・甕・鉢の各器種が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　頸部片と体部片が出土している。頸部片にはヘラ描による流水紋が描かれている。体部片には1条のヘラ描沈線紋が描かれている。

甕　逆L字形口縁の小片が出土している。頸部以下に多条のヘラ描沈線紋が描かれている。

鉢　口縁部のみ残存し、わずかに外反している。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK125（図版153　写真図版151）

検出状況　調査区南東部の土坑群の中に位置し（第149図）、SK124の西側に接する。当土坑の約1/2以上が調査区外まで拡がり、全体を検出することはできなかった。

形状・規模　調査区外まで拡がるため、平面形は明らかにできない。1.15m×50cmの範囲を検出している。検出した範囲での最深部における検出面からの深さは34cmである。

埋没状況　2層からなり、下から暗褐灰色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂の順に堆積している。両層とも炭片・土器の細片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　口縁部片（1073）が出土している。広口壺の口縁部と考えられる。内外面とも磨滅のため調整法は観察できない。

甕　口縁部片と体部片が出土しているが、図化できたのは口縁部片（1074）に限られる。

1074は内外面ともナデ調整により仕上げられ、頸部に4条のヘラ描沈線紋が描かれている。半截竹管による施文と考えられる。体部片には5条のヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK126

検出状況　調査区南東部の土坑群の中にあり、SK116の南東、SK120の東に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ円形に近く、40cm×43cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは36cmを測る。

埋没状況　2層からなり、下から灰黄褐色極細砂混じりシルト質極細砂、黒褐色極細砂混じりシルト質極細砂の順に堆積していた。人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器の小片が出土しているが、器種の特定も困難である。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK127（図版153　写真図版151）

検出状況　調査区中央北東部に位置する（第149図）。SD107の西側に接する。土坑に切られている。当土坑の大半は調査区外までひろがるため、検出できたのは一部に限られる。

形状・規模　当土坑の大半を欠くため、平面形は明確にできない。検出した規模は2.23m×71cmの半

円形である。検出した範囲で最深部における検出面からの深さは75cmである。

埋没状況　黒褐色シルト混じりシルト質極細砂1層からなる。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　広口壺の口頸部（1079）と直口壺の口頸部（1080）および体部片が出土している。

1079は、外面をハケ調整、内面をナデ調整により仕上げられている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1080は、口頸部内外面ともナデ調整により仕上げられている。口縁端部に刻み目を施し、頸部には11条のヘラ描沈線紋が描かれている。胎土中には4mm以下の砂粒が多量に含まれている。

体部片については、小片のため図化できなかったが、2条のヘラ描沈線紋が描かれている。

甕　底部片のみ出土している。2個体分図化した（1081・1082）が、いずれも内外面とも磨滅のため調整法は観察できない。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１２８

検出状況　当調査区中央北東部に位置する（第149図）。SK129・SK130の北側にあたり、SD112にわずかに切られている。このため、当土坑の一部をわずかに欠く。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で1.38m、短軸方向で1.20mを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは62cmを測る。

埋没状況　黄褐色シルト質極細砂1層からなる。黒色シルト（土壌層Ⅰ）がブロック状に含まれ、明らかに人為的に埋め戻された層である。

出土遺物　須恵器の椀が出土している。見込みが一段落ち込む平高台を有するもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時　期　明らかに埋め戻された埋土で、出土した土器はブロック状に含まれる土壌層Ⅰに含まれていたものと考えられる。したがって、当土坑は、出土土器の示す平安時代中期以降に埋められたものと考えられる。

ＳＫ１２９（図版154）

検出状況　調査区のやや東側に位置する（第149図）。SK130によって西側の一部が削平されている以外はほぼ完存する。また、SD109・SD110を切っている。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で1.40m、その直交方向で1.00mを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmを測る。

埋没状況　上層に褐色シルト質極細砂混じり極細砂、下層に暗灰色シルト質極細砂が堆積している。上層は若干の炭が認められた。

遺物出土状況　完形に近い土器は出土していないが、上層・下層共に破片で土器が出土している。

出土遺物　壺・甕・鉢の各器種が出土している。

壺　底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

壺　　口縁部片（1084）と底部片（1085・1086）が出土している。1084は小片のため口径を復元することはできなかった。口縁端部に刻み目が施され、頸部以下には5条のヘラ描沈線紋が描かれている。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。

1085は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。1086は、底部は指オサエにより仕上げられているが、体部については磨滅の為観察できない。

鉢　　1083の1個体である。口縁部内外面をナデ調整により、体部内面をハケ調整により仕上げられている。体部外面については、磨滅のため観察できない。

時　期　　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１３０（図版154　写真図版94・151・189）

検出状況　　調査区中央北東部に位置し（第149図）、SK128の南西にあたる。SK129と切り合い関係にあり、SK129を切っている。

形状・規模　　平面形は長楕円形を呈し、長軸方向で2.05m、短軸方向で1.24mを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　　2層からなり、下から灰黄褐色極細砂混じりシルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。上層を中心に炭片・土器片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

遺物出土状況　上層上面において、土器片とともにサヌカイト製の石器・剥片が比較的まとまって出土している（第150図）。下層からは遺物はほとんど出土していない。

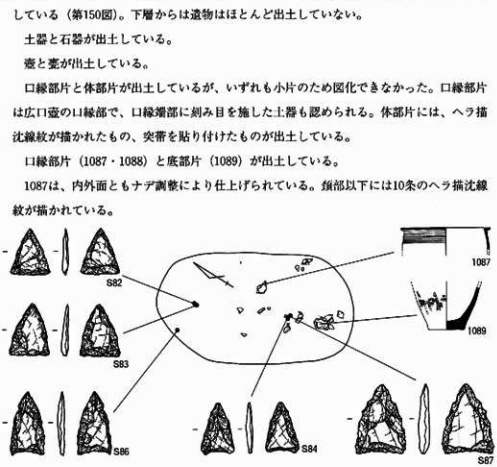
出土遺物　　土器と石器が出土している。

土　器　　壺と甕が出土している。

壺　　口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。口縁部片は広口壺の口縁部で、口縁端部に刻み目を施した土器も認められる。体部片には、ヘラ描沈線紋が描かれたもの、突帯を貼り付けたものが出土している。

甕　　口縁部片（1087・1088）と底部片（1089）が出土している。

1087は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部以下には10条のヘラ描沈線紋が描かれている。



第150図　SK130遺物出土位置

1088は、小片のため口径を復元できなかった。口縁端部に刻み目を施し、頸部以下に8条のヘラ描沈線紋が描かれている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

1089は、底部内外面および体部内面をナデ調整により、体部外面をハケ調整の後ナデ調整により仕上げられている。

石　器　サヌカイトの石鏃を含む大きめの剥片が10点以上出土している。そのうち石鏃6点を図化している。

S82・S83は平基式、S84～S87は凹基式である。S82・S83は長さ1.8－2.05cm、幅1.55cm、厚さ0.25～0.3cmと当遺跡出土の平基式石鏃のなかでも小型である。重さも0.6～0.8gと軽い。

S84は長さ2.05cm、幅1.35cm、厚さ0.25cm、縦長でやや小型の鏃である。重さも0.6gと軽い。S85・S86は長さ2.50～2.85cm、幅1.4～1.5cm、厚さ0.25～0.35cmと長さに対し幅が狭く、S84と似た縦長のプロポーションである。ただしS85は1.6gと重く、S86は0.8gと軽い。これは厚さの違いによるものであろう。S87は長さ2.75cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmと幅が広く、厚めのタイプである。重さも2.5gと重い。周辺加工のみで、やや粗雑なつくりである。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK131

検出状況　当調査区中央南東部に位置する（第149図）。SH11の東、SD111の南西にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で60cm、短軸方向で52cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは77cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂1層からなる。炭・土器の細片がわずかに含まれ、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　器種・時期を特定できる土器は全く出土していない。

時　期　土器が出土していないため、時期を特定することはできない。

SK132（図版155　写真図版94・151）

検出状況　当調査区中央北東部に位置する（第149図）。SK133の南東に位置にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈し、その規模は95cm×89cmである。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。

埋没状況　2層からなり、上層は黒褐色シルト質極細砂、下層は黒褐色シルト混じりシルト質極細砂からなる。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　広口壺の口頸部（1090）が出土している。内外面ともナデ調整により仕上げられている。頸部にはヘラ描沈線紋が一定の間隔で3条描かれ、各ヘラ描沈線紋間の上側に2条、下側に4条からなる櫛描直線紋が描かれている。また肩部にも1条のヘラ描沈線紋の下側に5

条からなる櫛描直線紋が描かれている。胎土中には4㎜以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　口縁部片（1091・1092）が出土している。

1091は、小片のため口径を復元することができなかった。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

1092は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１３３

検出状況　調査区のやや東側の北端に位置する（第149図）。SK132の北西側に位置する。北側の一部は調査区外に延びているため不明である。切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　平面形は円形で、長軸方向で70㎝、その直交方向で57㎝を測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは9㎝を測る。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物　土器の細片が出土しているが、詳細は不明である。

時　期　出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ１３５（図版156　写真図版94・152）

検出状況　調査区のやや東側で検出された（第149図）。柱穴に切られている。

形状・規模　平面形は不整形で、長軸方向で2.45ｍ、その直交方向で1.83ｍを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは15㎝を測る。底部での規模は長軸方向で1.92ｍ、その直交方向で1.50ｍを測る。

埋没状況　炭を含んだ黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

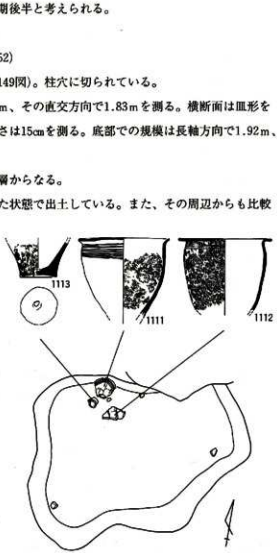
遺物出土状況　土坑の端に完形の甕が押しつぶされた状態で出土している。また、その周辺からも比較的大きな破片で甕が出土している。

出土遺物　壺と甕が出土している。

壺　口縁部と体部片が出土しているが、図化できたのは口縁部片（1109）のみである。

1109は、広口壺の口縁部で、内外面にハケ調整の痕跡がわずかに観察できる。端部に刻み目を施した後、1条のヘラ描沈線紋が描かれている。

この他、図化できなかった口縁部片には、口縁端部下端に突帯を貼り付けたものが出土している。また、体部片には、3条の突帯が貼り付けられている。



第151図　SK135土器出土位置

甕　完形に復元できるものはないが、

６個体分（1110～1115）図化できた。

1110は、口縁部を指オサエにより、体部内外面をナデ調整により仕上げられている。

1111は、底部を除いて完形に復元できる土器である。口縁部内外面をナデ調整、体部内面をハケ調整、体部外面をナデ調整により、それぞれ仕上げられている。口縁端部には刻み目が施され、頚部以下には７条のヘラ描沈線紋が描かれている。

1112も底部を除いて完形に復元できる個体である。口縁部内外面および体部内面をナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げられている。その後、頚部直下に２条のヘラ描沈線紋が描かれている。また、口縁端部には刻み目が施されている。

1113～1115は底部片である。いずれも、体部内面をナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。ただし、1113の底部のほぼ中央に焼成後の穿孔が認められる。不整形な穿孔で、その規模は1.3cm×７mmである。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１３６（図版155　写真図版151）

検出状況　調査区中央東部に位置する（第149図）。SK138の南東、SD112の南西にあたる。SD111と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で2.12m、短軸方向で1.56mを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは62cmである。

埋没状況　４層からなる。下から、褐灰色極細砂混じりシルト質極細砂、暗黒褐色極細砂混じりシルト質極細砂、黒褐色極細砂混じりシルト質極細砂、黒褐色シルト混じりシルト質極細砂の順に堆積していた。上の２層に土器の包含が認められた。

出土遺物　1096・1097は土師器の甕である。いずれも推定口径18.7cm前後である。あまり張らない胴部から単純に短く開く口縁端部は丸くおさめている。また、口縁部内面には横方向の断続的なハケメがみられる。また、胴部外面上半は縦方向のハケメ、1097では浅い胴部の下半は不定方向のハケメである。なお、1097は二次焼成を受けており、口縁部内面にはススが付着している。

時　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

ＳＫ１３７

検出状況　調査区南東隅の土坑群中に位置する（第149図）。SK122の東側、SK114の北西側にあたる。SK121と切り合い関係にあり、SK121の南東端を切っている。

形状・規模　平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向で75cm、短軸方向で57cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは29cmを測る。

埋没状況　３層からなる。下から、暗灰色シルト混じり極細砂、暗灰色シルト質極細砂、黒褐色極細砂質シルトの順に堆積している。各層から土器片の出土が認められた。また上層からは炭片が比較的多く出土している。３層とも人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。胎土中には４mm以下の砂粒が多量に含まれていた。

時　期　　SK122との切り合い関係、および出土土器から判断して、弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

ＳＫ１３８

検出状況　　調査区中央北東部に位置する（第149図）。SK135の南西、SK136の北西にあたる。SD111と切り合い関係にあり、この遺構を切っている。

形状・規模　　平面形は楕円形をなし、長軸方向で85cm、短軸方向で68cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmを測る。

埋没状況　　２層からなり、下から褐灰色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。上層から土器片・炭片が出土している。

出土遺物　　土器と石器の剥片が出土している。

土　器　　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　　体部片が出土している。胎土中には４mm以下の砂粒片が多量に含まれている。

甕　　知意形をなす口縁部片が出土している。

石　器　　サヌカイトの剥片1.9ｇが出土している。

時　期　　SD111との切り合い関係、および出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１３９（図版159　写真図版190）

検出状況　　調査区中央南東部に位置する（第149図）。SK140の東、SK143の北西にあたる。SK142・SD113と切り合い関係にあり、SK142に切られ、SD113を切っている。このため、一部を欠く。

形状・規模　　平面形は楕円形をなし、長軸方向で1.28ｍ、短軸方向で１ｍを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。

埋没状況　　２層からなり、下から暗灰色シルト質極細砂、灰褐色シルト質極細砂の順に堆積している。上層から土器の包含が認められた。

出土遺物　　土器片と石器が出土している。

土　器　　細片のため器種等の特定は困難である。

石　器　　Ｓ89はサヌカイトの削器で、楔形石器の可能性がある。長さ7.55cm、幅3.75cm、厚さ0.6cm。重さ20.0ｇ。

他　　玉髄またはメノウと思われる剥片が出土している。重さ12.3ｇ。

時　期　　土器から時期を判断することは困難である。SK142・SD113との切り合い関係から、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１４０

検出状況　　SK141の北側に位置する（第149図）。北側の一部がSD113により削平されている以外はほぼ完存する。SD113以外に明確に切り合い関係にある遺構は認められない。

形状・規模　　平面形は円形で、長軸方向で84cm、その直交方向で48cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは22cmを測る。

出土遺物　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　頸部片が出土している。６条＋αの突帯が貼り付けられている。

甕　口縁部片と体部片が出土している。口縁部片には、刻み目突帯が１条貼り付けられ、３条＋αのヘラ描沈線紋が描かれている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１４１

検出状況　調査区中央南東部に位置する（第149図）。SK140の南、SK142の西にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなし、長軸方向で90cm、短軸方向で75cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。

埋没状況　黒褐色シルト質極細砂１層からなる。土器片や径20cmほどの礫を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土器の細片が出土している。この他、サヌカイトの剥片3.7ｇが出土している。

時　期　出土遺物からの判断は困難である。埋土の特徴から、弥生時代と考えられる。

ＳＫ１４２（図版159）

検出状況　当調査区中央南東部に位置する（第149図）。SK141の東、SK143の西にあたる。SH11・SK139と切り合い関係にあり、両遺構を切っている。

形状・規模　平面形は楕円形をなし、長軸方向で80cm、短軸方向で60cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは27cmを測る。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂１層からなる。炭片や土器片を含み、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　土器と石器が出土している。

土　器　壺と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

壺　広口壺の口縁部と底部片が出土している。

甕　逆Ｌ字形をなす口縁部片と如意形をなす口縁部片が出土している。後者の土器の口縁端部には刻み目が施されている。

第152図　Ｓ90

石　器　S90はサヌカイト製の石鏃で、平基式である。一部欠損しているが、長さ2.0cm、幅1.45cm、厚さ0.4cm。目視でも分析結果でも二上山製と判定できた。金山製のものに較べて厚みがある。重さ1.0ｇ。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

ＳＫ１４３（図版155　写真図版95・152）

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第149図）。SK142の東にあたる。SD113と切り合い関係にあり、この遺構を切っている。

形状・規模　平面形は楕円形をなし、長軸方向で87cm、短軸方向で75cmを測る。横断面は緩やかなＶ

字形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmを測る。

埋没状況　灰黄褐色シルト質極細砂1層からなる。炭片を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　壺・甕・蓋の各器種が出土している。

壺　口縁部を欠く個体（1094）と底部片が出土しているが、底部片については小片のため図化できなかった。

1094は口縁部を除いて完存する。内面はナデ調整により仕上げられ、外面にはわずかにハケ調整の痕跡が観察される。体部下半に、6.5×5cmの穿孔が認められる。胎土中には5mm以下の砂粒が多量に含まれている。

甕　口縁部片（1093）のみ出土している。口縁部は指オサエにより、体部内外面はナデ調整により仕上げられている。

蓋　つまみのみ残存する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK145（図版155）

検出状況　調査区中央東部で検出した（第149図）。SH11の北側、SK146－SK148の東側、SK138の西側にあたる。柱穴との切り合い関係が認められるが、その前後関係は明確にできない。

形状・規模　平面形は無花果形をなし、長軸方向で1.47m、短軸方向で1.10mを測る。横断面は緩やかな皿形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmを測る。

埋没状況　2層からなり、下から黒褐色シルト質極細砂、暗黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。下層から土器が出土している。

出土遺物　壺・甕・蓋の各器種が出土している。

壺　口縁部（1098）と底部（1100・1101）が出土している。

1098は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。胎土中には3mm以下の砂粒が多量に含まれている。

1100は、内面をナデ調整により、外面をハケ調整により仕上げられている。1101は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。

甕　如意形をなす口縁部と底部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

蓋　上半部のみ残存する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

時　期　出土土器から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SK146

検出状況　調査区中央東部で検出した（第149図）。SH11の北、SK149の南西にあたる。SK147と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　平面形は楕円形をなし、長軸方向で80cm、短軸方向で58cmを測る。横断面は緩やかなU字形をなし、最深部における検出面からの深さは32cmを測る。

埋没状況　2層からなり、下から暗黒褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂の順に堆積している。下層から土器の細片が出土している。2層とも、黄褐色砂質シルトをブロックで含